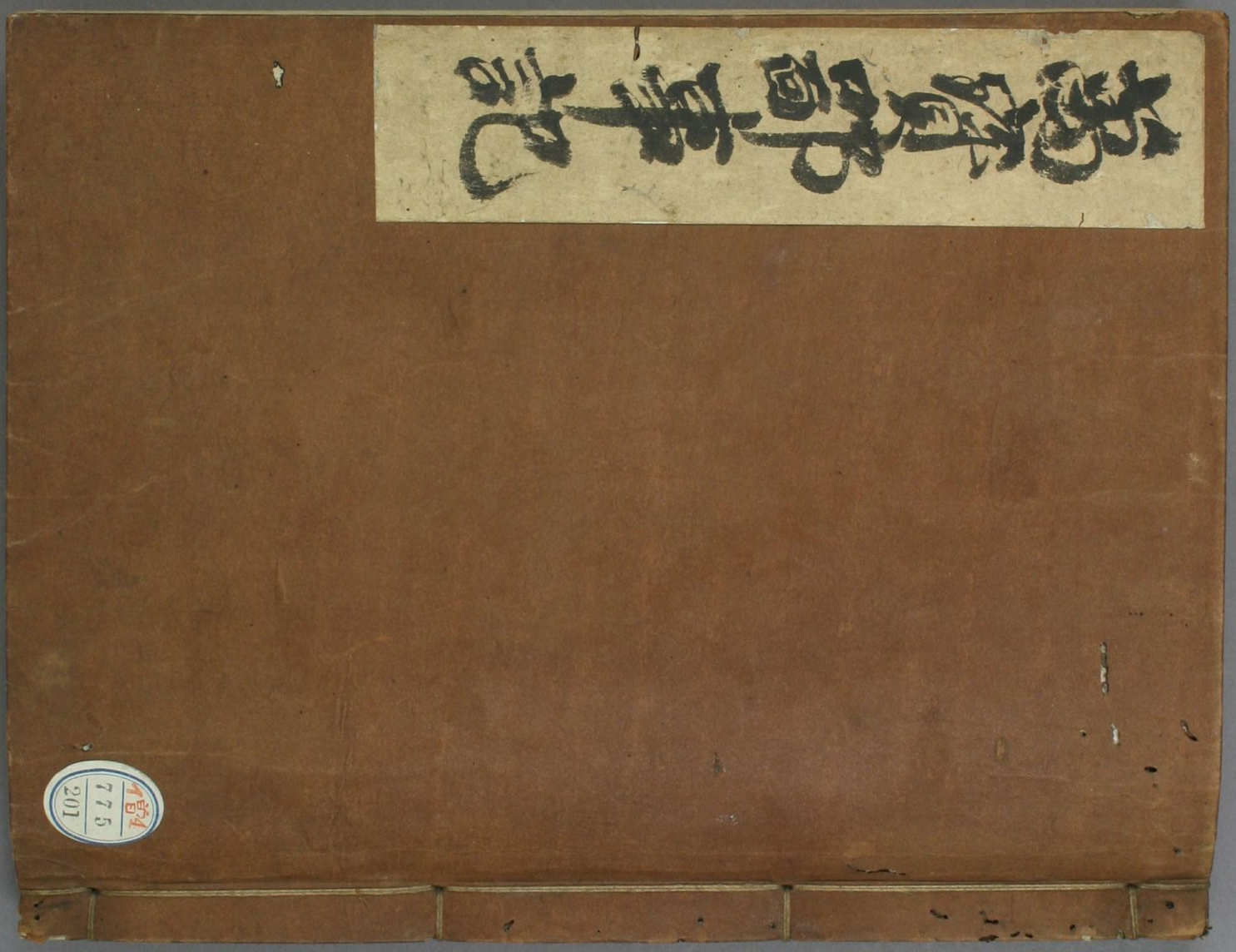

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Inches Centimetres

門1曽4
77合
巻201

大正二年一月吉日寄
中村楢雄氏贈

宮内省図書寮

萬齋節事記　冬　一月部

第一　衣服門

ぬいの事は衣裳のかぶれたるやうに一万ちこめ乃たるやうに一切衣類はかくりうる袖の事　毛皮乃用ひやうまでこれくさ

第二　營造門

ぬいの角は家のつくりやうとこしめ屋敷の板のわざる使ふ

ふさのこらやうに古部の作りやうに初りぶくのたるさびつちかぶ

乃うへのり小花紙の作りやうに蓮花乃作れ茶壺乃うへ

第三　一切の器物は本はかくりうる事　わかるぞ

第三　器物門

ぬいは八一切の道具乃用ひ様乃同じ様の定めに成ることくて

乃つくひやうに石角義分は考へやうに浪のしらやうさめ

やうに用ひやうにくやうに

第四　硯墨筆紙門

はけのやうはけのもちひやう墨金墨乃所うひやう朱墨朱胡
肉のうら紅藍紫黄白墨胡粉の和しやうもろもろ

第五　文字

はけのやうはけ字の次やう絵師あぶら文字とく法さ
乃ときやう四寸法書丁の羽ひやう書籍法りの法やう
なる字とかくホのるまで見に色をちうもろ

第六　刀脇指

はけの角ようハ刀小刀かしらのとぎやう清の名付やう俗の形の
もちひやう番くちうも

第七　収種法

はけのようハ一切の草木うへやうのるをとりてこれをふくへまく
旬ときやう採用ときまで番組よを

第八　筝

はけのようハ一切草木乃紀ぐしやうの所ちうみへいを

第九　香

はけのようハ寺南沈香乃ちうやう香乃原金やう香の色やう線香の
しやう衣服ようちとたく用炭俵の法やうちうあうもろ

第十　犬

はけのようハ沈つさ打ん猟猪あり犬あふまち犬猫犬埴の
犬ぐやうのちうえ紙地をとり法やう似よちうもろ

巻十一　紙細工

はけのようハ一切の紙細工ちぶちうかつての法やう障子ちうはこちう
ちうちさしたんざくのたやう四角箱表の箱のうら松湾硯
墨絵の絵紀ちうやう公作尾宝のちうやうはきまでちうくちうもろ

十二　染物

はけのようハ一切ての物乃染とちうもちや藍あぶらんぐふくちな
四年ぬぐちう物すちう小紋の法やう紋本の物のうらやう一切

仏和尚傳乃しくびしきあはのかくうる後のうたうう

十三　去来嵐

所は冬こゝろ故魂のれたのわる一切衆生の志ゝ嵐の陰月にしずもり光よはるる法と云ゝ嵐の合物よ

行くうる春をはるる嵐と云る法と歌くゝうやう

十四　雞鳴

此茶ケ丸ハ世ちよあゝゆる言葉のえんとくりくゝあゝやう

十五　石天氣

此茶ケ八日和ゝうあゝと云る事を風雨のやむとき出ざる付日月の暑とゝて陰晴とゝうる歌の動作ゝうてあるる

とゝうゝうゝ歌とゝうゝくゝうやう

十六　月令

此門の下ハ年中日毎のゝうゝうゝうゝ事と月令歌ゝうゝ

ゝうゝやう

十七　春氣

此門ハ人勇れ春ハ物の事ハ物の事ハ物の事

さてさてめんくなりふく

寶永乙酉孟夏吉辰

去る元禄十年の頃ハ其の用紙の事ハ
ちやうやく今こそ
はじめ

貝原篤信記

真名仮名書もと横十八舞毎件の肩ハ人ノ印と書て
と書うつすべきなり一と用てもと書易為也
○ノ印ハ本書きさふ同紙ハ毎その肩下よりあり
今合舞として出頁紙よりすりかへ

文政三年 辰八月十日

中村直道写本

萬寶鄙事記巻之一

一 衣服

一 夏月衣のうびて文付しふるハ洛の汁と用ひ洗ふべしと
あしなし 物類相感志ニ出タリ

一 文付ふ衣のうび出るハ柘榴の核でこすれてあらはゞ
去 同上

一 衣服ハ虫ハ梅の葉と共に洗ふべし 本草綱目

一 衣ハ虫ハ付ざるを知ると法。濃茶のかすを乾き
しらけたるとのこれば虫ハ付てあらざるなり

一 又白木ハ生ん時ハ式小麦の粉汁 又ハ米泔にてあらはゞ

一 又米ハ塩の入水にてふくして衣の黴ハ去ふくして洗ふ吸出
なく洗ふ又口中に香にして洗もす 事林廣記

一 又棗とうてきりめり水にて洗ふべし 式ハ飯と汁て
拭ハ又ハ香にとうて 正月今廣義

一 又杏仁麦茶乃子皆合細末〜汚しるしよりは熱湯にて
つくれと汚し 俗事方
一 又新に引る天南星ともつく墨の付ること出り天南星
墨にてまぶ丸粉にてさらりとまぶしたもの汚し 同上
一 衣に油の付るは苦竹乃虫くらたとえとらのひらけ紙ぬぐと
たべて大切にしてのもたべ〜次くしさいし〜 事林廣記
一 又石膏と焼てくだき粉にしてきれるものを
物と麻よりかけ一枚毛だしの氣なるを
汚もの 游宦紀聞 又滑石の粉と胡麻
一 又いろの汚と去ると用て
不〜付ぬて乾さいる時汚れ
きれるつと云ものなり
一 又海蘿ととさて味噌汁にて
一 又蕎麦粉と上に打紙とたべたるのたべ〜にえ湯の
蘇と入て汚しつ或は小麦粉と調て用べし 月令廣義
一 又白灰とうつよりはなれて大切
乃若汁に猫もと入て汚してもよし
一 又蛙粉と汚れ〜不〜摩〜つを干とたべ
一 又滑石天花粉細末 俗事方
末とふるひかけてくひとすれば
細末とふるひ細〜油にとい
一 又海蘿前の類はくくよりかけ
滑石の粉と干とふるひ入
くくびものもるり本体の汚れ
1 小麦の粉と上ふるくくと
一 衣服〜蝋の付るとすると
一 陰の衣と汚しるとと法
汚もしるるとゆりくく汚ふ 本草

杏仁川椒等分ごとて

一又ゑごの海の池と云く洗ひ物次ぎ皂角をもつて洗ふ　月令廣義　又
みそ汁のあつものとして洗ふ
一衣に血のけがれ有ハ生薑にて洗ふ
又牛皮膠にて洗ふ　茅根の汁にて洗ふ
又南瓜にて洗ふ
一白衣に血付たるハ紙にて　月令廣義
又ひしてもあらひ洗ふ　ひしの殼にてもあらひ洗ふ
一酢漬醬油の衣服に付たるハ蓮の根をすりおろしの汁　物類相感
濃く洗ふ　又衣服とも一日
ゝ衣と洗ふ　月令廣義
一新しく染付たるハ紙にて擦ふ
一新しく染付たるハ絶ん豆の汁にて洗ふ
一新衣の付たるハ芝麻の汁にて洗ふ　俗事方
後ゆの湯にて洗ふ
一藍乃衣と染たるハ水にて洗ふ　衣と云ハ染れば落る

一茶漬を洗ふ紙にて拭ふ
一黄流赤の衣と洗ふ　月令廣義
つをゆにて洗ふ　生薑とをりてその汁と
一黑き衣と洗ふハ濃茶　同上
一白衣と洗ふ豆ゝの皮或ハ茶の皮　月令廣義
汁或ハ芋の茎汁にて
一天鵞絨の垢とハ麻ゝもてこすり洗ふ
一洗ふるひのおりとハ洗ふ　物類相感
ものとの
ものゝ
ものゝ
ものゝ

一 ものゝ汚れとめしたるものゝ物 陳藏器本草

一 衣の垢とれたるを合歓の木の葉とせんして洗ふべし

一 衣服のけがれ猪のしるとゝ芋の葉汁にて洗へば白くなるなり

一 ものゝ汚れとめしたるものゝ物 陳藏器本草

一 衣の垢とれたるを合歓の木の葉とせんして洗ふべし

一 衣服のけがれ猪のしるとゝ芋の葉汁にて洗へば白くなるなり

一 頭中を洗ふ法 沸湯にて洗へば油氣なし 此二方共に本草に出しり

一 頭中を洗ふ法 沸湯にて洗へば油氣なし 此二方共に本草に出しり

一 信州の芋かの小豆湯にて洗へば垢なし

一 信州の芋かの小豆湯にて洗へば垢なし

一 粳とおなじくかけとゝ合せ煮てとぶとも糊なしとふ

一 粳とおなじくかけとゝ合せ煮てとぶとも糊なしとふ

一 又方 三月わど米泔にて洗へば芋のごとく沈むよひ〳〵なり

一 又方 三月わど米泔にて洗へば芋のごとく沈むよひ〳〵なり

一 布の晒しやう 湯に灰を加へ柳蛾の皮を入よくたゞらかして水白くして洗ふ日に干すなり

一 布の晒しやう 湯に灰を加へ柳蛾の皮を入よくたゞらかして水白くして洗ふ日に干すなり

一 大なる麻布を入沸の湯にて洗へば白くなるべし

一 大なる麻布を入沸の湯にて洗へば白くなるべし

一 麻の布を洗ふに法 麻の布を洗ふに法 麻の布を洗ふに法

一 麻の布を洗ふに法 麻の布を洗ふに法

一 縮緬を洗ふ法 麻の布を洗ふに法

一 縮緬を洗ふ法 麻の布を洗ふに法

一 統紀乃麻布 ゆふ湯よりせいの木を煎ずして丸
あぶりたるを竿にかけて乾かして小ゝと生るまま
りにせるあり 本草 南方にある糸とかのごとくなる物也
一 絹の美物と 本草のこまかなる物と
書たりけとこれはぬれぬ絹 絹をハず 類聚相感志
一 蜀葵の茎をかゝ中小一ちりひしぼとれて糸ゝ布をとるべし 続見
一 丁子と衣服乃内 絹乃内るどもよく入とくさるれ 脇ぬて物
乃文をとるもの白き衣などよく入とけたくさるもの也 紙
もて厚く畳てもくれた脇いでく物と深也
一 衣服の紫さめのもさるより 初ゆ 深と云 蘇の二伝の中ま糸と
つれで深ゆ 秋冬さるを
とけじ深ゆ 古今醫統 二見
一 老人丹田の氣よくして 腎腰ひゆるまくもみるもくさと
衣の内ゆ紫を入るる 脇ぬるる

一 養老新書云九月ゆ蒲絮をとりてかもを絹ぬれた虫とせ
ぬ内ゆ干乾して 柳の絮のごく なるとゆて蒲団とも帛と
もて方ゆ入くゆと作り 蒲絮と入も 枕敷ゆて行てゆ 原
さ寒ゆ作りてゆ 入 褥と 和漢 ゆる 夜さくふ
内ゆ作り 枕 ゆて 清 内の内ハ裏と脱 去て日ゆ干てさ
ゆ 本草 綱目
一 羊の絮 絹 裡 絹の皮とゆ入 米 都 てゆ入 ハ
り 絮 ゆて 裏 ゆて ゆ ハと 絮 流
水 て 絮 米 洗 ゆ 裏 ゆ
と 絮 一 筆 に 入 ゆ と 中 ゆ
ら 茂 ゆ 一 入 ゆ と 入 ゆ 皮 獺 ゆ と 皮 の 内 ゆ 用 ゆ 褥 ゆ 裏 ゆ
敷 一 日 ゆ 内 ゆ ら ゆ
一 皮の皮と蒲団 て 高 ゆ て 宇 次 ゆ 力 と ゆ ゆ ら ゆ ゆ 出 ゆ

一 皮袴 藁の皮袴とあり
也皮と表書せり 然るに
皮袴とは竹と四角ほど
竹をつけたるなり
然るに別皮のまりと
皮袴の
肉とれたる
たゞ面のみ烟草 相感志
一 ふとんの中に入る抱布団の内より
袴とくだし 出るなり
一 皮蒲団の敷り 四川苦の羊の毛
とくだし 出るなり 事林廣記
一 青黄色にして衣服の内より 同上
一 樟脳と称し 衣服の中に 同上
一 衣服の深く 抱いたるとき人も
知らざるとき抱いたる者 大分
抱たる 抱して用ゆ
衣服の抱深く 抱深くもあり
もの也 ゆえ 人に苦しうして 雑人の

くるべきその為に紙合ざるハ今ごろひとつ作りしひ〳〵

二營作

一 屋作の事家乃ひろさハ常とかゝ〳〵客あり向ハかせじさ
ゝ程なるゆゑ〳〵客あるとの所の場〳〵基ひろさハあ〳〵仏
お堂用のためあるゆゑ〳〵是を用の事又器物とゝく方も
ひろさゆゑ

一 ゝゝ屋宅と作るハ先陽の向背と考へて陰をひさ
湯ひろ〳〵ゝ小と陰すゝ南とおくまるとゝかくのごと
くれば夏の間あつさらく日あ〳〵らもよく月もひて京
氣ゝゝ天あ〳〵ゝ日のよ方ゝ〳〵てよろしるの後
若さ陰ゝらゝくゝて陽向背とゝゝらゝて南とふさぎて
西ゝとひ〳〵ゝかゝのあくゝして月のひろなく夏ハ夕日
さゝのてあつき事のゝゝゝ家ゝ〳〵ゝひたゝ庭間を設ハ

小ゝひろひて作るゝもうつの書院居るなどハ南むさるゝ
宅南ゝむひたゝ書院廣間ゝて夏涼のうゝ方退ゝて
作ゝて南ひさたゝるゝの更ゝ冬ハ夏の名ゝるゝ
山家ゝちく家ゝ生るゝ〳〵ゝ濕ゝゝて人の為小毒ゝな
るゝゝゝゝとゝきゝ〳〵ゝ三間ゝ〳〵をゝゝゝゝすゝあゝ
く強ゝとゝゝて〳〵ゝゝ乾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ疫病中濕ゝゝゝ病ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝ〳〵ゝゝゝて天の六氣ハ風ゝ暑濕燥寒ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人の為ゝゝゝゝゝ食物等ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝく池ゝゝゝゝゝゝゝゝ濕氣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝる石庭の池ゝゝ水濕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 家の作ゝ廣ゝ屋ゝハ時々ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ間のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 宅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

天竹ゝてゝゝ大和てゝゝハ第竹とゝくゝゝゝ

一 [illegible]

茲と筆の法　筆先より去と屋くゝ付る所なりうゝ白ハ土う
[illegible]くして黒ゝ裏白とハ裏ゝ板と付ると云ふ黄戸ひゝ泥戸
ゝ去ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ行る所なり泥戸ハ黒ゝ去高き所なり
家もちの泥戸ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ大角ゝ去と[illegible]ゝ[illegible]ゝ
こゞゝもの迄ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ戸定ありハ[illegible]ゝ

一 宰の所ハ用ゝ[illegible]ゝ泥と瓶ゝ金ゝ[illegible]ゝ方ゝ[illegible]ゝ泥と去
て下のゝ泥ゝて[illegible]ゝ年日ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
泥ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ泥ゝ[illegible]ゝ戸ゝのまりと[illegible]ゝ泥や
くゝ[illegible]ゝ用ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ泥ゝ[illegible]ゝ

一 金の大用ゝ[illegible]ゝ去と瓶ゝ[illegible]ゝて水ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ用ゝ[illegible]ゝ温暖の所ゝ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ泥或ハ番去
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

絶も共ゝ和てくさる義の材ハ肩に切ゞ左義よりゝ
まゝよくく洗て木の皮と板を板にて
てゝ腐る左義をもて初て行ひ左と
より板ゝ木さらゝ〳〵 祝ゝ第二大ゝ第三小
ゝ第四板より第六中より第六より第七白左二度ゝ
白左のまさゝ紙ゝ

一 左義のまりの内ゝ白ゝ有つ板と
ゝ木ゝ板橋板の木などの中ゝ板と
下とゝ〳〵 寄ゝ 強き木とゝ
ゝ板ゝ 堅て若

一 ゝんだたくゝ 大豆葉乃葉と水に浸て三日後 蒼蘇よ
つゝ腐らゝ〳〵 ゝ 食なゝ
ゝ〳〵 ゝ 洗ゝ 白左と食ゝ
汁とゝ〳〵 ゝ 搗ぜる

入食ゝ食せゝ 大根を洗ゝ白左ゝ
つゝ

一 ゝ 左戻を平ゝ裏ゝ 洗ひて用ゝ 腐なゝ 透
ゝ白ゝ ゝ 作ゝ ゝ 油ゝ
町ゝ 沈のゝ ゝ 油ゝ 加減
廿弐ゝ 冷ゝ ゝ 水ゝ
て切ゝ 水ゝ 水を捨ゝ乃 特ゝ
ゝ食 池と入る

一 左戻を一年ゝ 弱ゝ ゝ 或ゝ 冷ゝ
食ゝ 左戻ゝ 牡蠣戻を面ゝ ゝ戻
白左とゝ ゝ下地の強ゝ ゝ干
干ざる ゝ ゝ

一 さゝ土 ゝ ゝ 梅ゝ 二三
玉水ゝ ゝ ゝ食ゝ

ゑのこ米を粉にしてよく合する時えさびあるものを粉とへ
粉よすさをいれてまた合する粉
一 鶴の羽りをハ五月を過てよく抜て用ゆ
ちりぬれば用ひ〳〵下ゆりもちをゆひ〳〵れ粉月の粉よ
ゆりてよ
一 抜り度ハ竹を傾さしうるを主よさる法
先ゆりをのこうどくさをひしぐ〳〵〳〵二三ゆり粉を
度のゆりさふさたる方の下をとをさふ
〳〵ゆりよりてゆひさたる方の度の抜よ奥やぐ〳〵ひ
ろく抜て五を出さ下ゆ傾る方の抜の中抜よ抜よ抜ゆ
抜をあてゆ抜のでえたる一方傾なるゆと二ゆ以前ゆ
〳〵ゆりを長さふゆひて下く抜抜抜よ以ゆをあて家ゆけゆ
をゆふでくよりけ五かるてこをゆけ月の中よ立て筋を
もて一方よりこすゆ時抜抜よてよき抜小ゆくふるゆハ抜よ

一
ゆ〳〵抜ゆ抜ゆ〳〵ゆ抜ゆ下に細ゆ〳〵ゆ抜ゆなど多くゆ〳〵て
屏ゆものをゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵

金を空にして水をさし新あらと金のごとく乾る或八十日
もすてあをかの事とよて三度と塩気ある時あらと（或泥
と金て蓮根為芽ゐぐと拵あるひは魚とをりたし海
ぬりの八石と重て石をのりはけ一度ゆ多く合
きれでゆっと合ぐ。おくて分量をとりて度々合せ
改よく和合して悪い一塩ゆ多く入て苦く小麥
南むるる石ゆ地と拵てよ
戻らぬもやう

一 此の水潮うた牛骨と拵こしかつるもの 京醤油を見
度ゆ麻布ととりまハ 瓶の底と穿ち拵の角ゆ瓶の口ゆ見ハ
多く拵へ瓶の内ゆ細布と金満めて小平なるもと
きくとき麻の口ゆ引らぬ拵ゆ底ゆ
と拵らぐ為と拵をえて。○樣の為ゆ麻布
穴を開く為の拵ゆ拵ゆ拵て麻とをを。

一 夏月ゆ古井ゆ入ぐ新拵ゆ拵て入ぐ拵ゆ拵て入ぐ
井ゆ入毒を多く井ゆ入ぐ拵ゆ拵て入ぐ拵ゆ拵て入ぐ
ぐ拵ゆ拵ゆ拵ゆ

一 おなじく丸と書くなり丸〳〵ちいさく丸を書てなを
大豆の時道具とおもひ次きと書てくさぐめひ人ふしめとこだ
堪養袋と書〳〵也丸て故なるさけて始也書袋ゟ也丸なり
ふとも用〳〵大豆のとき堪とひつげ用るる用気なく為つめ
金物なにて見とくるべ小刀能庖丁なとの書又ゟ用と
でのもてて拾だし書袋ハ袋寒用とへだ〳〵寒と出てよ
先天秘の神を立品の書用を立ようかるれ次ゟ先天秘ゟ
作〳〵ゟ書用寒用なとゟ次ゟ月分の書ゟ形月分ゟ出ゟ見
用勝拾金銀衣類武器寒用ゟ出て新ゟ入べ〳〵新の用ゟ新と
〳〵ゟ入れくゟ入べ〳〵合ゟ也て拾ゟ出て拾ゟ出て虫〳〵ては
ゟ〳〵ふゟるみゟゟ用ゟるゟ寒と金ハ左用のよ
ゟ寒とゟるゟ用ゟ寒ゟ拾ゟ出ゟ合
ゟるゟゟ用ゟて〳〵ゟ涌ゟて〳〵ゟだ〳〵新ゟ毎年勝ゟて
ゟ〳〵ゟる用寒ゟ拾ゟ〳〵

一 大竈ゟ釜ゟ屋ゟぬる〳〵 烟突拵ゟ拵ゟくゟ〳〵 雑穢の草木腐
ゟくゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵

一 厠ゟ〳〵ゟ作る〳〵家〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵
ふゟゟて〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵
ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵
ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵

一 家〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ〳〵ゟ

一 杉生ハ小み青樹のいちげさいつもよりまく植てきびしく枝ふ
びしくされたるとうの葉にて硬のごとくになるをうちのの生花
入荻花ハ[illegible]とくにハ[illegible]きびしくひなかの用ひてよ

一 常の居間ハ風雅ふうさいつなくいとうしくいとうしくとよりとも飾ハ
りて紀兼帯ハ[illegible]常ハ[illegible]
さうひとりなりとし 居家當用

一 居間の庭ハ[illegible]ちくまつ[illegible]ハ[illegible]植[illegible]ハ法氣ふかく[illegible]秋
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]と食ふる[illegible]

一 要ヒとうく[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]家の[illegible]植[illegible]ハ[illegible]
要[illegible]室町殿式より見

一 室の内ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]植[illegible]ハ[illegible]
[illegible]南天[illegible]小植小くらるーびーう抑 流丁記
小菓など植ハ[illegible]み菓苗なども植てよ 梅桜杉
地などハ別段に小植ハく植[illegible]

一 居間の庭ハ[illegible]ハ[illegible]植[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
植て文人を以て[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
一本の植ハ[illegible]ハ[illegible]男行[illegible]
植る必ずよこ枝のはらを植ハ[illegible]竹のみて[illegible]植ハ[illegible]
ハ[illegible]

一 補 栗の木ハ[illegible]ひうえ[illegible]植ハ[illegible]久[illegible]
ゆるものの栗の木ハ痩地ハ植ハ[illegible]可[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]

一 家を[illegible]家を[illegible]ハ[illegible]その下の基を[illegible]
[illegible]ハ[illegible]水溜りてあ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
して乾けるかたてを[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
氣あり[illegible]家を立家とされ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
四ハ腐ると家杉ハと衣服[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]人の

為ニ茶一乃毒ニ成。腥痢乃病ニ成ル疫病ニ成ル事ニ成ル

一蕊ニ成ル事ニ成ル

一蕊ニ成ル事ニ成ル

万宝鄙事記巻一

萬寶鄙事記巻二

第三　器財

一竹くかごの類の用れ　久しくなる筆の軸などハ板ばれちゞまるを必ずと抜出しちゞむ如損ずるなり

一松樹ハ木なるゆえ筆の脂を書ハ木なるゆえ酒と混ぜバ脂を生ずるなり

一硝子のめぐりに灯ん　灯ん芯を挿ひて

一鍋の者合ハ酒を也ハ湯乃定よ　物の深付病ざるよ　高法の業とくやうして用ひ

一大豆ハ豆腐のふもとゞりと成ひ病を八湯酒の漬也　蹇驢嘶餘

一洗の接柏と放ハ　たきと成ル　蕎麦粉乃灰汁ハ定と漬とけて

ぬるゝなり　同上

一 灌子乃根と結ふよハ麦藁ゝせんぞとのぶるせんぞ乃なさ
ゝハ決乃宿と今を歯ふけんふゝねとそよめる也 口上

一 漆ともゝしる器ふ苔葉とをくゝ〳〵ぬさ清掃
とゝふゝしてけたる 相感志

一 洞器除石などの器物ふ洗ゝいぶゝ磨をひゝ〳〵研重て望
ゝあゝ〳〵ぬ出ぬ落る也 同上

一 蓮乃茎と茎〳〵干陽して流とあゝ〳〵ぬ垢ぬ落る 同上

一 飯器の内ゝ〳〵鱠ゝゝゝ物をその尾と行んゝ杖ゝ〳〵ぬ 本草

一 新沈の決乳と去るふハ米粉ふ入て考るふハ米粉ふ
又云ふ和ふ入て去 茶湯秘書

一 洞器の接目ゝゝ遠るゝて乳漏ゝ去とふゝぐゝふ入ゝ搭と
用て洞のゝゝゝ去ゝ〳〵乳乃ちゝんのゝ細孔を塞玉
くゝゝ搭の洞器のゝらゝふ玉洞器のゝらゝふ大を用

一 てつゝくやきゝ流ゝるゝゝゝ搭ふのゝて
絲乳のゝゝ抹ゝて合て搭ゝ搭ゝ堅ゝ成ゝる干
て搭ふ決玉ゝ肉ハ腐ゝて上度のゝて薬さ布のゝ成ゝる時
もみ法ゝ乾〳〵ゝ堅ゝ搭ゝ塗ゝ乳ゝも洞法ゝ
搭の垢ゝゝゝゝ用て洗ゝる時ゝ法ゝ垢ゝゝゝ

一 汁ゝ〳〵ゝ和ゝ搭ゝ茎て汁ゝ十ゝ〳〵ゝゝ一度ゝ
紙ゝ法ゝぬゝる搭ゝ搭ゝ〳〵ゝ池ゝ〳〵ゝ紙ゝ法ゝ
玉ゝ〳〵紙ゝつゝぬゝハゝ〳〵ハ刀搭ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ汁
どゝゝと云池ゝゝゝぬゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ法ゝ
苔の搭ゝ法ゝ〳〵ゝ中ゝ〳〵ゝ中ゝ〳〵ゝ苔ゝ〳〵ゝ汁
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ茎ゝの汁ハ大津の西大谷町ゝゝ
大和ゝゝ紙工ゝゝ
杖ゝ作ゝてゝゝ杖ハ 弔木 藤 虎杖 前胡 白芷

一 草麻 法行 草は似て草も長く大也 丈菊 麻るり

一 紙にすして色よき海扇と用て扇子とも海扇の柄に打とる
又扇の打と用ゆべし 扇は素りうさし素より西りうる
方と如何るうさ割めるうし 又打とうたるべ

一 弓のうれもうるを塗して紙多る 扇樊と合て紙れて出るべ

一 めとはふる湖すてうり法ひ四さうくいとあるて三尺四の条の
又えざる法より 一日三てれて法ひ扇に樊湯 ようあるべ
かりうる

一 杉の木ひく棺と作るとよ 堀めて腐らぬ 朱雅注

一 甲冑と夏日は干ようふ 冠 一阿とうるを
よ布ふ木綿とたるべ ふくうるさめて一枚三翌日もと
乃雲は杉もむべ

一 聘に漆とお合せて宝地とたるべ 水に入てもとびるる事
なし 撞脚と合てもよ みる信る乃事もよ

一 漆法 漆は行る物 まして聘を初て漆とかへて 妹
合をべ 又松脂と加合るもを 是八ふく乾て さなあるる又
漆と入もて漆の性ぬて用なり 聘を初るう あまり四さ附
もひあるべ 又加減を 今くさ用せたりまりうお

一 漆とおけふ法 八板およ漆を入く紙よりのごく ひろて紙の
をたるうり 出ると用る 片紙すて 漆るる之

一 桐油漆の方 唐絵元版 桐油絵 密陀僧二十目

桐の木を似る 木のあふる 清水大津より 実うる物
細末して 左の油 へてめるさ 朔より 秋乃八月時まで三四時
沸る也 よ 時 ふ 沸 ふ 之 油 を 用 て 糸 の ご く ら く と
ちるく ね 也 焼 て い 油 に く 成 て よ き 対 に 茶 碗 に 入れ
紙蓋 して とき く 行 る べ 一 面 ぬ り て 二 面 よ し
と一度ぬりて 入ぬるかし や 八月 干 て そ る 物 る ハ

法平にらべ一面に四方の角にある丸みとなるよう絵べを用
ゆ絵べを撫めて細末をべ〜 そのうち物をるるづく南蛮と合せて
あるべきもの〜 ○こんその末深ぬりもぬくにせもぬぬ
るゆ中まて者下地〜をくよふこと 拙之糊わく洗うそう
とめるゆ

刷毛も南蛮の紙ぬぐハされでかくかて
やくんこと〜を用ふハはめ 拙もぬ
池のかひうたきはかり〜 わくてあ〜 熱臭さるゆ
一 ゆあにくこうなど臭くしてうせざるたえ水を以て二三度洗
ひて紙書と搗くごさ湯に洗をてみるゆ〜 洗へたるこ臭
きるなり 俗事方

一 茶白石磨キのこのれるとたぐよ四〜の皮と肉を用て
こまるたきうでんと色とけうけてるるを揉〜ぬく
もるうる事かし

一 茶黄紙などをさた洗あるゆ清ひてよ絵ひて氣と漏さ

一 石と煮るる 胡葱と洗さたらし冷水を焼物洗ふて
煮る水藏もたゆ 熱水をそ煮る事三度計り洗たなる
洗方をもゆもそ悪し作るる後〜作て其茶ゆ煮
るる一度時れたて入るものとくたくなる 事林廣記

一 角と煮るに 地骨皮 牙硝柳枝水を用ひ角を入て煮る
皮と放くなる煮れて和ゆ物器〜作るべ〜 色も其茶
ゆ〜て煮れでかくなる 同上

一 象牙と煮るに 其藏水を煮 色も焼物を用 水かけで紙水
と深煮るる 三度時和ゆる時用て 其水を煮ハかくなる 同上

一 象牙ゆ〜 多くなるると芭蕉の樹の内より一度とけで白くなる 同上

一 珠ゆ〜 ゆるとも芭蕉の水を以て洗へ洗〜 一度重で白くなる 同上

一 補 新綿の洗氣ぬきれ 新綿つまで用ひるあゆ水と混とを
号ゆ〜ゆ〜と 孔とゆ加〜 其日たゆ 重て〜を洗へ洗ひ〜みぬゆ

その汁をかけ加へて煮てもよし又沒入氣ぬる

一 絞り樟志の和 絞り乃云〻絞り出し汁の落ひ〻くもと
樟ずして 紙屋いろもぶの数のう氣喘氣ふ〻多深なるのお
わひ皆つひべし れわひ〻うし〻ひ〻ふ〻みさとへまも
用ひべし

一 さめやそらもつら沒やう
ぶうまして 併和まして 竹
竹よりなてよ 竹のそ
竹べし 腐 至分入ハせ
ごさとよ

一 廉角と切ねにハ入しくく形のひ〻しくとみ
なる廉角と 角と 麩ふよハさめやそらと用ふくまる

第四 硯墨筆紙

一 硯乃石ハ〻ふ〻ふ墨ハ〻さ〻ふ〻ざしで墨とよハくまりてよし 沢よる
で硯ハ〻く墨ハ〻ハ〻ハ〻

[illegible]と云て墨こうるもあり[illegible]と云しなと書せて[illegible]
[illegible]ときは[illegible]と用て[illegible]
[illegible]と[illegible]のふさ[illegible]
[illegible]のもの[illegible]て墨とよくすれば[illegible]
[illegible]ときよく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [

一 硃墨 朱十匁 水飛 定粉 雌黄一匁 右極て細末し篩ひ合せ
もち絵とこく練りて布まてさし茶碗に入れ置く法千代也 但朱墨ハ
一 朱とつるよ白胡水と用て朱墨と同じ
但月よりくく和絵に紫部に云物の根なり
一 雌黄墨法 雌黄 黄蘗 細末して 水和 第十朱墨と同じ
一 白墨法 白堵土 五匁 滑石 五匁 寒水石 土器に入さとし 同じく
蘗粉 ゆめと入る きり掃 鶏
右極て細末し水和して 鹿の子の殻の内の白を紙にて粘し
乾て再び研くもて練り 胡粉 蛤 乾て 乾乃殻
水十匁 光膠 少し 和して 練るとき 十匁
の茶と入て和し 溶るとも用ひ 煮沸して
胡粉と和きる法 大豆と水とを 和きる時 細末
きりぶ布ふそうして汁と用胡粉と和して 哭よ(も)豆宮と
書けば字永くたちも擦と者る水よて大の豆と磨てこし
胡粉の和して墨よりはくはつよくくよ 乾 者
一 藏筆 東坡以黄連煎湯調輕粉 蘸筆頭候乾 収之則不蛀 山谷
以川椒黄栢煎湯磨松煙染筆頭藏之尤佳
一 筆のぢくハ墨油 ふしよ浮るゆえ 出らでとまて
筆ハ紙の中に入も毛 夏の時 一日一夜
一 夏秋のるハ筆器に 樟脳 入も
一 胡粉 鬼乃毛分て 筆に心 入て
一 胡粉筆ねり 筆よく洗て 久さん法
もバ後 やくさる筆の後と用 胡粉筆ねり 流 そのまく用
なと紙 てもと紙 て 筆のさきと湯のひ
〜 紙ひとびて 指 流 ひとりてのうるをして 用
一 筆と蘆の けよひ〜 りの 筆と洗て 染 水 筆

一 筆毒の毒毛とは麻と毒とうたる毒毛は麻毛毒毛毒毛
ハ毛やハ〳〵ふて久〳〵さ〳〵場合 毒ハ毛起てこわさ久〳〵き場合
ひさつぶ毒毛ハ岩の穴より毒ものとよ 毒毛毒毛より毒ものとよ
毒毛ハ毒ものより毒ものとよ 毒の毒毛よりハこわく狐毛
よりハ〳〵狐毛ハ毒ものより毒ものとよ 狐毛ハ毒ものより毒ものとよ
毒毛ハ〳〵毒毛場合毒毛ハ及ばず 鼠ハ狐よりやハ〳〵ふ
毒ハ鼠より毒ものとよ 毒毛ハ〳〵毒ものとよ 毒毛ハ〳〵毒ものとよ
毒毛ハ〳〵

乾くと又墨にしるし池と云の墨の底にたまりて戸文の袋とき
ちゝと成しに見るに戸文の下に油をそくばくもぢ古へ
學範
學範にもそうゝ又四熟文八京と物さぐりて用ゐたり
一 拂墨芭蕉葉梧桐葉貝葉紅葉などに皆文字を書
天然成しるし 花鏡に出り
一 車村廣記云筆を洗ふに熱湯につきて一服の間ときて湯さめ
冷水にて洗ふに沈氣をそ鬼角の筆にしたゝめ洗墨をそ大字と
一 墨とをもふ小清れば耳のあつと入れしたゝめ洗墨をそ
かくこゝろの池と入てよく洗ふに墨をもるべ
一 墨の墨を紙にすりしる墨をなして清のうすのり清と光紙
あらそふと論をそ若清のこと墨をとりきてその筆ととるべ
一 好墨の拂じしるとバ光猶中の硯とあつ硯と云さト
乃硯にかゝる時火氏去墨をあつ硯の中をそくかのるに
墨をとりあるべし もとのごとくしばくあるら

一 宮月硯水こゝろよく湯と入て墨と和べし番椒もよく湯
又胡桃に泳ぐる番椒もつたよし
一 補 戸内乃法 二角の池なるに十粒あまり喬ぐる池は
いれ墨に墨多くなる時さゝごゝ角をとりて池よりとみもぐさ
とまぜよさかぐんよ走めくゝ用
一 うてゝうとうとうとして戸内墨乃ゝ小用也墨乾るぞ
一 筆とをもとりの法い強ゝ時ぞ京ふりけくとゝ墨
れぐゝさなり
一 唐筆とれうとうと和筆のごとく弛をれ拂くゝ松をべくゝぞ筆
ぬぢくの内へ入るかよぬきやゝ拂して筆乃ゝ
とりて墨をひくゝ成しに

第五　文字

一　取鐍字法　蔓荊子二文　龍骨一文　松子霜五分　定粉少

右之末として落かの字のうへとかすてめし右の末とふりけかくとさしすかいち拂去る　俗事方

一　又法　うへ厚き紙と紙ひとぎ揚板乃て紙よりとおつけ落字のうへと紙と間てくひくべしうへに墨うれりるは又別乃紙とうへにひつげいくびもたのかくるすれで墨意く落○拘あるもの掌と合せ去さうれ拭せしめ紙墨の所うるこれとあくまりたる掌くよくのもだしりよ干べうで墨の書屋よりうもかくのかくもべし

一　絹布乃上字とかくべし薑汁又ハ薑形と拭れし墨ちうで　俗事方

一　沈紙よりみ字とかくのハ皂角とをかるのしこれとて墨とて

りうみ字とうさてよし　同上

一　沈紙ハ墨つぎん紙と拭てうさて池と紙かくべし

一　紙へくかてふもりり墨つぎて沈よ米粉うる洋と入るべし

一　久紙ハ紙のうへ墨付うれ糯米乃粉と入てるべし

一　色紙乃寸法　大久紙八竪寸横尋分　小色紙八竪寸横尋分

一　書燈　居家必用ハ書と使ふ油の池とすとも極く眼

を損ぜず仕方やうハ毎夜行桐油三十目と入てうさ文もで

かきべし又麻乃減も文とと去の無著乃油芥子の油つ紙の

池なども同一行桐油三十目と入て池蓋の内

ハとけばやを有くみは薑を取て鹽少許を入て池蓋の内

せて蘇木と用て灯へと家しぬ乾て紙せと物る

一　草麻乃池よりく紙よりと書ハ帝の天とうれで

久字とある書にもあり　相感志

一　時珍曰鐵朱浸醋書字於紙背後塗墨如碑字云云

一　又白字乃法　狐狸ハして字と書ようり墨とぬりて日よ乾

まて久字のあるハ墨付ぬ〇又法紙と拭の付

膠して字をよくさせよく乾して干すあるいわく墨をぬり又
よく乾し然る後にとかしてもちいて膠のあるゆえなり深田研字のこと
一黒紙に字をかくには墨乃中に新印をとりてよし
一書畫をさらしたる今相傳には青用ゆるとて方の七角ほどに沢
芝栢葉にて拭日にてぎしぎしと月の廣狹に応じて大
紙にしたがひ拭して家
乃ほとのくくのごとくもしかびたるとき方法なれども
なるべくいまだ栢葉紙小ゆえにぬぐうてもかびたせぞ
一書をさらしたる家中にてくくに掛ちて自然に乾せ人に書を
くるさ家にいたしたるぬべし紙書おくるもの日に干し
乃ちたるくくに竹竿にかけ干すべし
書よく乾る又地に新しき薄と布て干して書をひろげ
も印表紙に当てるとかさなるとも板に紙ら表紙と
下に干すべし紙の裏に
午前の新に書く紙の内に

綱じみ紙月の紙京に墨のうつるを
紙に綿にて新に書とさらしたるものをぬぐ書
板ぜで紙に書をさらしたる家に用ゆ
刷きりに明らかにしたる畫軸に
紙に布をぬりて干す畫に表と下に
一書板に面のとりかたと又道中所にて彩色をとる大きな
る甑の内に入て並に干ねとりと紙にて乗ば板ぜで　王氏談録
一畫并文字をどく表裏をべらぬ法
なるべし用ゆる家範
一文字を手さうしたるに白き原紙をかの下に敷てうせど
分りよしあるべし
一書板にて小池にて板海螺蛸滑石各半分龍脳半分
白堊各半分　右細末して池のつきたるをひのまて
り練まぜて油乾して池とゆりて茶とうかくみわよ一和

一　ひゝ茶と行るもよし

石よ文字と書て煙ざる法　乙鼠の屎と水にて墨とをすり石よ字をとゝけたる乙の中と墨を敷る○亀乃屎のとりやう鼠と蛇の茶のゝ屎を煎る○乙ぬるのはなきのゝ屎と亀と色ゝ紙とうんきんと屎出る山院草木をもて書よ出てゝ又絵ゝ入蓼耳の汁とゝて墨とすり字をとけたる中にゝ蒼耳の油入よくねりとゝとゝもの也

ゝ仏前の器よ乙色てもとゝ仏前の器の塵よ入色とけても らぬとゝて物の性をとる入物類乃相感ゝ入身能乃理也

一　神　小字と大字にする法　文字とゝのゝ大きさにゝ合せたゝにゝ入るゝ法　ゝ

第六　刀脇指

一　刀を紙ざゝ八十月ゝ入ゝ研てよゝ二月より九月ゝ乃刀ゝ磨ゝ入れのゝ中ちゝひて粘ゝ入るもの也色秘事なり

一　鍔の文字ゝ　胡桃を十ゝ干ゝ実とゝゝて煎ゝ二ゝ入ゝ

一　刀乃さび　本紙ゝ入ゝ入ゝ入

一 口1付る油の粉　なりたさ磯の砂さと研さ茶研して
研しぬりひて砂糖する事二分溶て出るとぬぐひ去て
りよ洗し用る切羽に包こと三年とまきて柄へ付ケ
刀のさびあるをとえ小刀とて研れし次し池と付よく拭ひ
て油とさう方の洗えしろ紙の粉とけつをてぬぐひ
とて後の形へ付るるいさびあり又面中に滋あり或い
暑月は汗出るとき乃事なりさもなくて後の粉とさび
くけく拭たし刀乃汚や失ふなり用ひるとき紙
ふく切く拭ふたしさびとれときに小刀と用ひられでよ
く落ぬ去れども常の人小刀まて落せて成ぬよ
錆と用る也

一 人とゆるるかよ奥付くく落ざるに油とければ勿よりつ
一 刀鞘塗乃鞘の小口よ方の拵さるれく小口付とけくそで
此のやいとの方とけひるに難ふいあり〳〵奇南香と用ひ

てみそうの事なり用ひてさびで切草に出てう
一 松茸子の油刀剣よぬりて
一 礦石灰の内よ錆黒と茶とさびいでて　物類相感志
一 剃刀しさや〳〵　砥やりかるるがよ　剃刀の切てを
ちよ磨ぬ〳〵　砥乃方いかでうぐで多くぬぐ
一 小刀こざや〳〵　きう刃の方と切ぬぐ〳〵書と多く磨
ぬ〳〵
一 刀乃用付よ付と用ぬ〳〵で藤柄はりひ是柄の灯と用
ぬ〳〵かりるそ付るる小刀茶刀あり要用久
さをとるくもさびおぼ

第七　收種法

一 豆乃種とをく法　初めよりの用きして実のよく入て大なる
全をとるぬ〳〵なりるさぬ乃形なるとりるぬ久く

日よく乾しる時根の葉を生ぶるまゝ切て紅花
少もまぜて日にかゝと壺に入て口を
みとりあ日に干て全く乾たるを九月の比
らを出すものも

一 生薑と収る法　ひすゝのおのゝ去と洗て
皮を去て生薑を皮を去てとりけて
しゝんやゝ

一 みな法　九月に掘て陰の日の陰にして湿気なきを瓶
乃おゝ穴を掘て藁を敷て用るなり根より
取だゝ去ゝ去ゝ藁を敷ゝ一重ゝ入て上を棚を
作て上に置て藁を敷て生姜を全
下にぬるを去ゝ去ゝ湿気さりて去ゝ去ゝ
寒さをとゝぶゝ島より掘る時
樊鬱金の根を収る法　生薑の回りを去ゝ

一 蘿蔔子　胡蘿蔔子　菘菜子　ほうれ花のおゝ小根をつゝ
去て大なるを取て
一 芭子　牡丹子　ハ熟ゝ去ゝ去ゝ生ずる事
早ゝ成ゝ成ゝるをバ取て
一 水仙の根ハ六月の末ゝ掘出ゝ日に干ゝ小根を一
枝にして入ゝ蔕を暑ゝ去ゝ去ゝ
月の初ゝ去ゝ肥地ゝ
一 叩たゝ去ゝ去ゝ去て中ゝ去ゝ九月ゝ植
生ゝ去ゝ去ゝ植ゝ
一 種樹書ゝ竹ゝ去ゝ三月の
ゝ去ゝ去ゝ八月ゝ去ゝ
一 銀杏の実ハ三角あるを植だゝ去ゝ去ゝ男

末ハ其の葉乃中に殺りくれるうゝ〜胃末ハ大末ま
ゆそと実のうゝ切く接べ〜
一蓮ふ乃もぞゝ実ふ熟し〜ふとび南年の夏月ま水泥
乃角のうまびまれうまけ〜ぞ苦し根と出て久〜
たりて枯まだ生〜ぬ〜
一櫻櫚乃皮一年に二三度或ハ四度剥だ〜はぐされだ末いく
そ長ぜで皮と剥ま乃ぞのまのうま剥初だ〜茶れな
うゝ中になれて昔ま乃ぞ
一蘚麻ふと多くうゝて沈と〜紀世〜下肉〜
みを油紙と作〜用ゐ○池とふ法蘚麻ま切〜去ゑ
作つまたゝら〜水一升ま入〜煮れを沸〜出ふと沸ゐ
つまで煮ゝ水ま一度乃ぞ〜に抜ざる限ゝも紀世ま
ちひ法用ま蘚と本草綱目ニ出ツ
一補ふ紙づ乃抜ゝねとう〜ぞ角ふまだ生〜ぬ〜當

時ぜざる抜ゝ末表乃ぞ〜ぬと〜うて久〜ゝ生て
うまを生〜ぬ〜桂乃の実を水中に入て生ぜず
ふま抜ゝ生ぬ〜ぬ〜水中に〜ふだ〜光も実乃う
うゝ河ゝく留ふまびぬ〜ぬ〜蓮乃ぞ〜
ゝ乃河ハ生〜ぬ
一竹の根乃津ふ〜ゝ末アて角ゝ〜ハあ
めと抜ゝうゝ乃ぞ〜
一ゝ紀乃ぞ末を掘抜ゝ
一紀ふと葉ふつゝて平〜
一赤楊と抜ゝあまゝ〜ゝ実乃ゝく〜ひゝ
穴とゝゝ黄蘗と行ふ〜混楊乃樹の根廻ゝ推ゝく
乃ぞくふなる本草ニ見　さ〜あゝだ〜味び樹決

第八　花

一菊花十月落あるはあれども霜風あたりて萎しやすし切て瓶中にさしまでくくしく挿るべし花を切るは約束と常てはの毎日あらためかへ水をかへ又瓶口をよく洗て氣を洗ふべし又菊術として瓶にさし置る菊もまたかくの如事あり

一寒菊はこれに反ひくくかるのまたとき時は風霜あるうりてもやく萎しやすし瓶にさしてはこれ水氣と

一菊天乃実はたくさんひとるを好て合てそのまゝ生て食せ

一特菊茶などの花を瓶中にさして参るはその中乃水と

ゆり去ふくやさ塩とぬめりとてかめ水をとゝ又沸湯

を花となしてかひくく　相感志

一とゝ花乃枝とれるは早朝霜と常て未開るものとろ

ぬれ〜湯を物るつくぶで日当く霜かゝく時は物とれた者

をあくとゝるのうたあるべきもあくれとろ（一説日の用る志

かゝ落　花譜

一餅中に花をとゝるは只一面絵すゝ　色をあれで見ぐるゝ小

餅に花をさゝるは疲功のるがすゝ繁雑なるはあ　二種

とゝるとゝたいるとゝるとゝ合て一枝のとゝたるとゝ　同上

一梅花と瓶中にとゝるは二枝とゝ　牡丹花乃沈丁

ゆるとゝたるとゝそのかゝ絶たくくやくたゝ　同上

一又梅乃枝を塩乃中に挿るで花ひらきて肥態あり　陳眉公

一梅花とゝやゝ開くくひらるは　井乃内にさゝるはあるは

やゝ沸乃湯は丹の中に湯氣ゆるさゆゝ麹室小いく

もとゝやくひらを　一花枝とゝ

一梅花とゝやくとゝたるとゝ水に入るれなりとゝ花

いまのたくはひよりはるかにまされり

第九　香

一　香とゝく灰の厚さハ炭の大小にしたがひて灰乃厚さも又かはるべし　灰乃内へ火箸ひくあるとさしてよし

一　奇南香　沈香乃ごとくやゝハ長サよりも少し細くすべしひさ仙の長さ二分四方程のごとくにもきりて　もさとゝのまるれば俗ちゝて　小刀ゆにてゝくるくるとまわしさ出りあるひハたるより出るる丸形のまゝにてもよし

一　沈香白檀を紙に黄土にて包みとゝのゝ　本草滙

一　香猪の皮ハ茄根と皮と焼て用ゆ　月令廣義

又根枝をとゝふさらし乾して灰にしてよく火を煮ひて起久るよし　墨莊漫録に出

一　炭餅　炭十斤　鐵屑十斤　合擣爲末以生美葉三斤再擣爲末以生美葉三斤再擣入糯米膠和以印脱成晒乾用或作獸炭亦可用焼紅三十日久

一　衣と香とをかけて香とゝのひるにハ火壺の内ハ沸湯とゝのゝ　衣と香とゝのゝ時ハ焼香とゝのゝ　衣と香とゝのゝ　香譜

一　あさき奥と去　ひるもゝ　洗干けるゝ粉とゝ　厠水源なとにふるひかくれて悪臭ゝ　みるうでといふまあるそと　ゝもゝるゝもよし　又頂ゝ　ゝ　蠱虫せぜて

一　洗衣香　牡丹皮一両　丹松一分　細末ゝ　衣と洗ひてゝ水よた乃茶とのゝ　居家必用に出り

一　ゝくゝとゝくさんの白ひと　ゝ　何首烏と同ゝ　ゝ　ゝ　

かくまりてちくもで

一 線香を所さだめ所をはなれて多くみぢかくなれば多
もやくもの方に火を付て立れば入やすくくうれを 行厨集

一 造香餅子法 やうかうの炭三斤 細末し 蜀葵茎或
八花を行皆うを糊水でとりくだてはさうのようなる
丸し 押ひらめ日ろ乾し 壺よりもとくで 若葵な
うはなれのうをを用べし 香譜より出そう

第十 火

一 蠟燭 乃ろがるにい塩と塩のかけれたるをとけばやむみいよ
ざるんでるのようらそくのまりに塩と表ばのれを 簡便諸方

一 燈火 灯油とのこと入るる 新しさと周匝〜久く
なみ入れ新しくても風なき氣ぬをとるへ灯くし 冠よおなじ
玉氣のぬるるやうにとくべし

一 白蠟を水に加へ燈火に煮て こうの火より長くもれてあるべし
減ずる事すくなし

一 吹燈不滅 焰硝二文 硫黄二文 黄丹少 右まり合せて水和
しこの紙を巻て紙ようこと 燈どのれを吹ても滅ず

一 省油燈 然るに市の下に孔のあるを小穴より毎夕水
と入れて油なるれば 事言要去る出そう

一 面脂の續れ 瑣碎録云蜀葵とはねて中のまりとをも
で 揉るもさうん次

一 同法 硫黄 平夕 樟脳 三十夕 右末し 燒石すて和合搗
竹七三尺ばかり 廻つ入すべうに 右の茶と明れた水中に搗

一 水上點燈 不求人の法 樟脳と一ちまりて 松脂和
法干ひ こと付水中に搗て 又よのようとして 盃

一 三日月 火こうのるる事 紙燭よ 油と付茶碗 碗の中に和して付 乾ふくも 椀

わくまつをもつてひとをおこし
ゆてこの月の形をなぞへ
おもしをなげこもをもつぶし
屏風乃こ武ハ林の内ハ
火とおもひこんをたゝ
紙地物之　鶴の毛ふとんを紙のようにより日中ひなたに
こをとゝ物の皇熟しく紙をぞ久しくれて焼る　不求人出
一　松毬を火にたゝばやかるとるして自乃茶こなる梅の木をきき火
まつれて茶とする　烟月よりくも月あるかゝぞ
一　牝牡こゝ花ゝ　ひこうを紙をもだし　焼んきるくしても
火ちりうる舞沙つをを掃除してうげとをぞ
ぬれと四やきて池減るそのうへひりあきらかゝを
一　茶の実の池と久しく物ちゞよ　ちりゆゝ　ゆゝして減る
ちゝる　新しき池ハひりもくして減るを
一　火鉢ゝ火とへる事　灰ハ藁をこれある灰と月ひ物のうちを
ゆゝく掘と灰と四方にあぎそ　ちゝぶこゝ木ゝ織火と入おこのめ

ぐりと灰まして　堀こ中を堀ゝ　炭火と別ゝつめ　ぞを
和まゝく減ぞ和ゝづめハ羽ゝ　ゝもこゝを　仕しゝ風あ
ハ時ハちやくこゝえやしゝ
一　炭ゝ火代とく事　ゝ炭の上に火と重をゝ　ゝ　ゝ火
西じ　おこるなり
一　火とたゝゝ法　いゝて　ゝ　ゝ　ゝ

又に小窓をしつらへ二ツ蓋あり内にはまどを中に入るを
く仕掛しかあるを下に灰を入て炭をそこに入て
を一日一夜きえずひるをよりて衣類と布ひて
染とあるこめ与る八重桜の内小く伐て方とあるこむ為ざ老
人ニ所なり和漢紙をそしてはるばる一年の初みそぶなど八新
きやとして六畳の青汁乃あるめやくなると用紙ともみ豆汁
と相しして伐るべしこの煙湯潔石と用るにてきれり
一 和と書て二月ものこるを時ともひくもよす
竈ニ夫ゆくよ薬角くと沸茶乃外ニ出る八薬乃費くな
とすく和と茶ニ用ル八そくぞ奴婢ニ半とそくて云ル
薬とうねやとはしなるぞ剣 家ニ大行く沸炭とおこを
一 永風呂乃茶八桶の中ニふく入て底にもはるく灰のそるて有
るねをるなす紙用ゆべし中流の炭火とへとけバ人の湯と
沸ねやこと薬とたくるもおく湯ニなるれ人力と薬とれるを
ねえぞ沸さ一日茶の二ツ乃費と乳一兄桶乃用るく火を続ゆ
ニ茶の外小火をそくさ沸さ茶八火多くれに
紙をそるゆへとそく湯となる
よくもゆる炭と用ゆ人力とうねやをそして湯とやく沸ゆる
一 又水風呂とそくにはまの上をそ薬あるを行へて沸ゆるは又水
とはれるより初ようあと多く入ると沸ゆる事をし
又冬月乃風呂ニ水と入日暮
むそのまく湯となるとそして重ね湯水と入ると乳火と続け
焼湯ニ冷すに上乳して汗出乳
一 補 火災乃と記烟乃多き方ニ害ル
ひらをでむせて仮ぐ
一 小なる火ゆるを八蟹ら桶ニ入れと仮桶と入て外と風呂
一 火事の時ふりの内とゆくを八ちく紙とそして子桶と入
一 陸ニ袋とそくさく火ゆる八湯ニゆくべくを外ニぬもくに

あれたちぐすり是にて
一 沈あぎの綿の内ゟ火出るゟ水にてもまそ菜と合てふさと
ぬるべ
ぬくぬと入れくも沈る膏菜に練るなり水ゟ大きへゝるに水とか
ゝれ
ゝかつて火大きたるくあるべ冬ものゝ
一 ゝ
ゝ
ゝ

大かるもの也

一 大事の時紙を挿へ[illegible]澄まかくる物をうり尺一打掛せて
[illegible]して[illegible]ふ[illegible]ゝ打掛[illegible]ば[illegible]り大と付る事あるその
用心也

一 大事を[illegible]ゝ筆乃さゝこまかだめをくゝと付てけをべ[illegible]ゝと
よく物くして大ゝとえんぜ藁なぶと用れでおくもあるかだめ
ハ大よあひてハよく和らになる物也みあらもよ

一 金紙とうく袋ハ桝乃ほまて法ゝ[illegible]べ大よ入てもやるぜ

一 石灰ゝ石水ゝるゝときハ大もえいぢるものゝ

一 餅米と一度よるゝく[illegible]いれ蒸[illegible]ゝ蒸とおぢくゝだてハ大
氣よゝくして米の熟[illegible]事[illegible]ゝ蒸[illegible]ゝ大
氣さんよ沸よきれで即時ゝ蒸也熟[illegible]

万寶鄙事記巻三終

萬寶鄙事記巻四

十一 紙細工

一 ちゞ紙作法 かゝてゝう上下になる給紙とえゝゝ書ゝ字不
書と用る入中に用る紙も皆切ゝも金紙ゝゝかねてゝう
ゝゝ材ゝて[illegible]ゝく法て巻[illegible]ゝ ○生漉ゝ嫌ゝゝとかに
乃水とおゝ入て用るうゝ紙もゝ紙加ゝ作る時板
おゝゝ四方に紙ゝゝを沸ゝと畳ゝ行とおて上水とゝ
汁金紙とひゝぎ法き用ゝ[illegible]ゝ糊とゝて つぎ紙ゝ紙ゝう
のゝゝゝ和ゝ二すあまりおゝて ゝ 和二乃ん月ゝ[illegible]ゝ
紙のゝゝ袖ゝゝと汁つぎ紙とかゝゝゝう ひつゝ刷毛と用て
ゝゝゝゝ[illegible]ゝて紙ゝ白ゝとふゝ[illegible]ゝ
ゝゝゝゝ汁金ゝ入ゝゝゝ和付ゝう行乃ん[illegible]ゝ同ゝく
紙ゝゝゝ付てゝう 三度ゝ同ゝ紙捻ゝう和ゝも毎ゝ
用ゝ同ゝく[illegible]ゝと汁て大の如くゝ金ゝ四乃ん月大のゝく

たて紙捻のうへ和紙にて捻ひ合るとき上に成と云て紙をを
下ようにあきて紙捻の和と用ふ事〳〵堅ク結付相の紙と
ちよ一度ん程なる事なかく成たて乾とおあまり紙を
板ばやうにおたして場のあまり〳〵分紙にたぶと引者よ成て
結ようにて和紙にて結ひ合ひ物ようにとひろ〳〵ぶとく踏付て
板間に干次ぶ〳〵干て板入ようにて流二ぶん引て無為干て
〳〵句論ようにて一度に流間〳〵ぶと乾て干て板
うへ小ぶ引干て〳〵とも乾ぶ乾書の紙天ふ時年。
黒文乃名又黒文乃名ぶ〳〵あ〳〵ぶとうて よく〳〵ようにて

一 漉乃製法 ちの板帯と去ぶきて巻ぶ武弟入合加ハ相ハ
入ぶ巻一番ぶ巻ぶて板小ちの乾ぶ巻ぶたり 清ようにと
よおひろ板入ぶて〳〵ぶて四ようにちの乾ぶ巻二番
ちぶたり〳〵壺に入ぶ口ようにとく物さぶ ちの中入物さぶ

一 板入ぶ重て〳〵月冬廣義ようにて漉一番に水入弟加ようて
ちの板と收め貯ふ法 生漉と用ひ壺ようにて口ようにとく密さぶ
て年〳〵ちよやうにもの蓋乃者と置〳〵 又行ようにて
口ようにとく物さぶて池ようにて 武云板ようにて家の内
つ板ようにの巻ぶ巻の巻ぶ上ようにぶ時ようにて揺ようにて
一 筑海巻乃法 ちのと水入板と去く一番ようにちの筑海乃で
くに板つぶ巻ぶ〳〵と紙ようにて樂庄の下ようにて
次ようにて板ようにて 雷金ようにて生流ぶ
板て板合せ巻紙ぶと
又漉紙ようにて用ひてよ
一 藏乃者 又ちのと煉ぶ〳〵ぶ巻ぶ巻ぶ巻

先蠟を鍋に入れ火をとりてあらかじめ油に溶かしひかるかよう蠟をこの油と
入れ合せよくかきまぜ火をとりて冷まるまで溶かしよく
冷けるを待て唐乃土瓶或るいとと入れよくかきまぜ口まで
入れそのまゝ冷まし火をとりて揚蠟なる角のまゝ油に
ひたしておき蠟の白色乃色のなる様に成るまで一遍
油を拭て刷毛乃毛の抜るまで一遍
と一度油にひたしまた布にて拭ひ後干す表
裏共日に干べし干てのち油一杯にひたし
乾かす

一 大方色この油にて唐土瓶に入れ三年及 白蠟二度 唐
油に成る 色つやさき及 大鍋にて煎じ表裏共日に
干す表裏二度宜しく一遍油にひたしひるがえし裏
桐油にて布にて拭ひ裏表共日に干てよく乾かし
布にて拭ひ後干てよく乾かし

一 桐油にて初めて付合をとる大根のおろしに一合の豆腐
一ツ入れかきまぜ火をとりて煮詰めなまこ乃さ角ゝざる
にてあぐ

一 桐油にてのやぶれ障子紙に芭蕉乃根を掘て
汁をとりそれにて刷毛にて塗る
一 桐油乃布にて拭ひ後干す

一 かつをぶし油 この油にて 唐紙にせさせる
大名細工師 紙に硯乃墨
わさびにてもつかせず 洗の中に
しつ墨 一面にきさらはあり 大三文字
きれいにとる 豆のこなにてあらわす
油紙法 紙十枚かさね うらに紙一枚 油にひたす
さねの上乃紙に油をつを塗ふかく ごとくにして上紙を枚

右のごく池とめう碪にてうつもの

一 ちぶと用ひざる紙衣の古板

やう四蘭の根はとさしず古砂ごろりとあらひそして沒ぐ

とかるくうれ少く煮る事うるとき

煮汁にてあらうざるとかうう

板にうるくまぜとりうすて大海うとひてうく押さぶ

糊おそやうにうして絞さうう解き太乃煮汁をおくりへそくね

板にて押ぷう糊のかもんにして紙とつぐぷぎ板刀のけ神さ

けるりかひけ煮かまつぎうを切そのうをこの海ぶ海る

地ぶあるいハ板と用ひざるはそのうをあ乃汁をひて地し

見地とこのむるハ見地をそのずしてやくしをなるのり干て板ハ

さとけるうハ板ともはるる絵の色をぶんまくのうの

絵屋糊のぶんまるまぶ絵屋のうさ紙乃ちよおうさのうすり

右のけりとけるにて小弦平けりとうさてそ海見なそも海る

にくもうと糊とうるひぶ

あるくひ糊よ行るゆううの法き糊わどようもくしてひぶ

地下てきぶハもちひぶ又紙とけるうハうんのあるぶ藩のうとぬ

見ぬうるあるよ紙とけてあるくそのうようものうと地くまひ

きて紙くるる紙海るるよ小ぶんれぶそうあるとうあ

れかくるよくとみきねくうう

乃うとひくけるくさ

一 楮汁祝ぶるものを用て金箔とかく

楮汁と白及と乾漆よ糊して紙とぶぐ永く

くるれかちくるる糊海ぶまきまうと穀耕録ぶえくう

ある海るとるる紙のけと解ぶひ金色海る

地その紙ぶあるるくく水ときりと海きて地海乃金色海る

ぶるのうとひて右の紙とそ乃ひうぎを絞ぶけと海く

又陸くたのぶくくる海るとは下に海るとをてるべ

一 面の[illegible]の風障子は風とも障子紙ともいへ障子紙ようにんをくのうと
ゆをぬぐ[illegible]ようにして[illegible]
一 屏風障子打つをしうの法紙屏風とかぶるとかぶるたく
ひみをぬぐうるべし[illegible]乃方[illegible]
さ面よりしんで順よかる物 先[illegible]
引[illegible]のうとも[illegible]
風障子乃[illegible]つ方屏風障子とすこし[illegible]
ぐるふ[illegible]押[illegible]と一[illegible]
[illegible]なし 屏風障子よりのりとなて輝る紙をはし
[illegible]
てとう[illegible]
てとうら[illegible]
づくりてよ
一 紙障子 給なとと屏風襖障子なとふ押せ事書をたて

刷毛をあてとつ[illegible]
[illegible]
押せ[illegible]
事を[illegible]
[illegible]
一 屏風なとの[illegible]紙と法さ干て[illegible]書よ水とかひく[illegible]
乃法[illegible]
一 屏風障子畳紙なとよ[illegible]紙書書を押せ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一 腰張乃法[illegible]
紙つちて下[illegible]
[illegible]

一唐紙に地とする法　紙百枚ごとに白礬二十匁宛を煎じ
湯に煮ぶくして紙の面をふのり筆にて
陰干して一日さゝぬ内に刷毛にて平板に伏て挽ん
十分に乾しめ一度ごとに仕舞て二度目に
ゆるく成　居家必用

一唐紙とする法　紙百枚に二匁宛の割合にて
枚ごとに十一枚を除くの白礬を京水に一宵
出す桶の上を重ね上に直に板を置て
一所に成て下ひくく成
ものを金を入三日ばかり桶の内にて日に
三度ばかり桶をゆさぶる
ゆくもの変色しても捨ずに
なを再び発法に入て
その光沢して油紙のごとく成なり　同上

一紙に地とする法　白礬十匁白礬六匁水八合
を煮こし清乃なるを白礬を
入て煮よく融ずと煮こし清乃なるを白礬を
白礬八匁細末にして
よくまぜる但古酒の
よくまぜる水八合にて
子八匁に成る程に
物色の紙にも
うるぶる紙に
知り家中に
紙に地とする法　水一升　先ふのりを
煮こし清乃なるを白礬を
白礬六匁　水一升　先ふのりを
煮こし清乃なるを白礬を
白礬十匁
ゆるく成
紙にも
刷もの
刷て
乾
唐紙
唐紙
唐紙

一 塗り紙の皺の除し様　塗り紙を水でうるかして干て水
気なくなるを待て皺をのばす法
一 表具の紙に水をうるかして干て水
気なくなるを待て皺をのばす法
一 表具の紙は古く糊のうつを揭て
つをかぶせ紙に合する裏よりうつを
しかるべきもの〜物のうつを
除かしたるよし
一 又表具の紙に皺れたるを
しるしなくなるとは糊に
て糊をうるかして糊を
ぬる法
一 唐紙に張付たる表具
く過くれば糊にて糊
唐紙にて張付たる表具
古紙にて表具なるを
軸物の表具をするに膠と用れば蟲やすく糊を用るをもちゆ
はぎ只其棟ゑの末を用ひ漿粉の四一入を加て調ぜよ
用るのうとも糊は杉相藤坊本花梨を用てよし　五石
象牙古作紙換ずる法
表具の糊に白礬樣脳を加べし　白の内ともむさぼはくふぜ
行をあがり池もりとれて紙よりはづれくこうえてもだく
ず百年新なるごとく
一 豆乃糊蒙霧の糊にて紙をぬれば数十百年にぬれもこわれず
一 軸物乃表を高く糊乃和らかなるとこのむ蒙やうの
うしたる法へくらうてくるうものの高はて糊こはる法
るとすくつけて風るれば溶くれるなる久くらうて
しもるるなり
裱褙書畫不蠹法
うるもとつて表具をするは虫くいぞと月令廣義二出

一 侍賛雲路の抹茶とうら法　瞿麦と墨やきうて天汁よ
うし表紙とうて書て小ぶくろ紙を入て天汁かくると云表紙
抹茶だうり為る　武八竹筒に入て天汁かくると云表紙
風ふくのごとくせうとうく　鶯驢嘶餘
一 書院にて屏風などの ふるぶつ ふるこ 降夏
奉りて 抽て 風 ふるこ 為
一 茶碗の数と紙まで ふるこ 大きの 茶汁の
あめのかくるこ のうよ用ひ紙 みくるべ
つねの 相 ふるれやて

一 十二 深抹
冬茶深　下地を薄ふく 沈て 新 さ 揚物皮と
煎じて 六度 入れて 又共 泥 泥 ふ 太の深
抹 ふ 沈 ふ 沈 ふ 又泥 ふ 泥
二度 沒 ふ 濃 ふ 揚 ふ 揚物皮と
巻 深 武 揚物乃皮と用ひ なくの 木の吹 風
匂 深 ふ 沈 ふ 揚 ふ 深
吹 ふ 地 ふ 揚

一 白茶深　冬 乃皮 ふ 茶 白茶
ふ ふ 一 ふ 深
深 ふ 白茶 ふ 茶 ふ 白茶
一 元 深　下 深 ふ 白茶 ふ
茶 茶 ふ 入 深 ふ 深 ふ 白茶
ふ 沈 ふ 白茶 ふ 白茶 ふ 白茶

一 びうぶ染 上地に流染をよそのこと也 [illegible]

一 [illegible] 青地に [illegible] 楊梅の皮 [illegible] 染

一 藍染 上地に [illegible] 藍にて [illegible] 染

一 布帛染 [illegible] 山[illegible]の皮をせんじ用てよし

一 [illegible] 布帛 上地に [illegible] 柳葉 [illegible] 染

布帛を [illegible] 用てよし 日[illegible]て [illegible] 法

[illegible] 苟の [illegible] 板

[illegible] 布帛乃 [illegible] 乾

[illegible] 黒 [illegible] 刷毛 [illegible] 板 [illegible] 乾

[illegible] 黒 [illegible] 刷毛 [illegible] 乾

一 糊を苟の [illegible] 糊 [illegible]

七[illegible] 深 赤なり 本染を繰返すハ 藤柳 [illegible]

苦藤 十五反 [illegible] 十五反 [illegible] 弐八[illegible]反

[illegible] 十五反 [illegible] 桐 [illegible] 反 [illegible] 桐 [illegible] 三

六[illegible] 三[illegible] 桐 [illegible] 三番 三番

[illegible] 三番八反 [illegible] 桐 [illegible] 三

[illegible] 桐 [illegible] 三

一 [illegible] 八深 [illegible] 柏乃

[illegible] 布帛 [illegible] 柏乃

[illegible] 汁 [illegible] 刷毛 [illegible]

一 [illegible] 桐子深 [illegible] 桐子 [illegible] 深 [illegible] 桐 [illegible] 深 [illegible] 深 [illegible] 反

[illegible] 桐子 [illegible] 反 [illegible] 反

[illegible] 深 [illegible] 反

[illegible]

一 梔子染の法　梔子皮を実も細かに刻みよくもみて布嚢にて漉し清き汁に米と共に煮て一沸あげ布嚢にてあけ乾き綿を糊と共にそのまゝ煮て干す日よく乾きて色バ物のうちに文変ずる

正平染の方　明礬　右糸石細末　輕粉　右の粉を糸にまぜ合せ一日もよりも沈みなく

黄蘗　右糸石細末　輕粉　右の粉を糸にまぜ合せ一日もよりも沈みなく

茜　かさまたは綿よりこげつるぬれ板にて大きに解し乾かしとふとき藁のくきを沈の内よりそえ搾くりのけとよりねじりとも入れて板にとじ合せて多く搾さる

板にて挟みとり出し乾かせんとして水洗せんとして水洗せんとして水洗して入用のとき用ひ〳〵久しくこゝろみるものなり

絞の具を和〳〵衣服にかけて染るなり

色をめるよう染ぬ乃ぬくなる小刷毛を用てかさによくぬり〳〵こみてよし

○絞の具を用る方

赤さ　黄　茜　黄さ　沈香　黄蘗　紫草　藍　胡桃　櫨　つきぶ　丹　赤土　赤石　白粉　胡粉　黄蘗　赤　赤　赤

茶を加へ煎じ茶碗にて八茶碗ほどに成るまで煎じ分け
飲ませ病人に二度程宜敷し　泥一丸ほどなれば
二度の汁を以て煎じ用ひ　右
一　籠布にて搾り布にて布にて搾り出し
法半に成るまで煎じ　柿の果を必ず入る
一　柿漬の法　柿の果を湯にて煮て布にて
搾り出し　二番三番絞入　二番二合程に成る迄煎じ　早稲藁を
焼灰にして　右の藁灰　汁と三四度に成る迄煎じ
三度漬の内に混ぜ　漬たる時　取出して
乾かしよき時　二三度に成る迄煎じ
一　練屋の糊の法　糯米を搗て粉にして
やはらかなる糊　蝙蝠　此糊に入れ
るるはいかがわるくこれ無よいと見る

わるくの考てその時大豆を焼粉にしてよく煎じ粉にして
よくかきまぜ　入さめざる内に入坊主にて
湯を注ぎ　よくまぜて用ひる　糊をくる
湯と入れの糊を入れる　入別の茶を
湯にてまぜてまぜ　右
一　紙とりぬの法　紙をうすくこんやのりとかく
して紙のうらにぬり　その上に水の二度ほどうつ
用ひ　その上にぬりとる
一　茶碗の茶　茶碗の茶を法くせんにて茶碗に付
ちうちぬとつぎまきて　右

萬寶節事記卷四終

萬寶節事記卷五

十三 去蟲鼠

一 鼠の穴を去る法　大風子を池に撒すべしと云ふ

一 蚤を去る法　萬蕃の末を席の下に敷く或は蕃

の葉をあつめて家に置く月令廣義に見

一 蟻を去る法　ゆうの縄を蟻の傍に置かば

て来たらず　物類相感志

一 蚊を去るまじない　樫の木を焼て灰にし八月の月令廣義に云ふ蚊の

脊をうつる法を敬をるに云ふ

相感志に曰蚊の多の胡麻

又浮萍と荒治に云ふ

物を

又法　蒼朮四文　木鱉仁　二十　椒黄　武多多　別研　太形にして

蜜ふくろ　鶏卵の大きさにひろうて陽にほし　居家必用

一　又法　橙の皮とかしてもの入れて煎じ　又法　柚の皮を乾かし

又法　柚の皮を乾かしてもの入れ煎じ　又法　茅根　孫真人方　右浮薬とうもんげいしかれ意ぶ

一　夏はほしうるぎと　おのれ　ちゃだ　蚊　とくにをを　俗説

一　夏月蚊はうまをとて　ちゃうの豆乃まきをとりてのるべし

一　又接脚法　胡椒　右　ちゃうの人　粉　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

一　宿ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

一　くけだまもくくけの粉　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

酒　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

一　田　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

きき　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

うら　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

乃　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

で　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右　ちゃうの人　粉　右

一

て害とあすそれとそて沒る英藻をぬる

一 書曰乃四又に衣類の霉をけ拍などの樟脳と包こて金
で也なり 樟脳久へ用たしさえてなくなるやさ下に
それにさえぬ樟脳やさ西て法を茶碗よ金上を用れ
なる茶碗とおりひて金也しらと低る物をくつあてそう
なの上を上て抜くそれし沒ぬ樟脳なのあさこうりて低と
さまし玉屋の茶碗をちらかそぐ代をくを底をとして
ちりひ金をるをとと成して たのどくを法て茶をて底と焼
たみ茶のひぬるを筆をてさぎて打てかちあ茶をと
みをいを玉焼西と津也をそ上たの法をとくまを下 が根よや
きみをくるいをくしして麻ぞ

一 書曰古年一 薬種 年一切のしとをるい樟脳と西
くらをあをてをの霉をられをくぞ
屏風のちをぞう法書をの裏打などを英病とせんと成ぞ

一 粉にして糊よ加へ也ぞ
毛氈 みを皮 木綿 西などう毛氏と焼て焼ぞ也てむ
しくりを焼乃骨と衣霉よ西 本草綱目 出より

一 拓物年中金をる拓まる法 うるさ乃皮と衣を焼てそと
綱して年と物をくもぞ

一 拓物年ち濃乃拓丈力なと蛭ざる法 蕎麦粉の厚ぞと
そくぞ竹 竹葉なぞ上蕎麦かと玉で筍なぞぞ

一 入拓物さ乃 米粉の池とぬをぞ しくハぞ こぬ乃池とう
やうハ霉乃ひよ紙と拓乃ひまりとのうまて付橋上茶
拓とをくく玉さ上と火と玉てこぬのるをきをあ屏丈玉
玉バ茶ちんち水よ池とう入る

一 とそて池し法霉とおちを

一 立月木とむ 物類相感志 中巻の灰と蒙よ多くぬと
金世和俗 拓るすり人多くぬ代をれぞむ

一 ぜぜ芭蕉葉にて包み茶碗の間に入れ置て吉し
又云茶碗に茶の芽のおちこぼれたるを用ひ
一 又茶碗に春夏の時ハ水を入れ置
中食ぜん後ハ湯を入れ置
一 又云ちさ茶にもの茶ふとかこまぜ
一 茶碗無出方
秋冬ハ用鱗水酒出則盡宜
一 嵐を吉方 芭蕉葉にて嵐の宮をぎぼ嵐をつくる
一 嵐宮よりつきてあれ也
春夏用石灰山砒霜鮮魚水
一 食前さの外類嵐ハ
ハ前後ハ俗ハ
うつさ
一 ぜぜ
一 ぜぜ
一 ぜぜ

一　脳乃子男女とも法　無年四十九を本とし毎月育ずば五と加る女の年の数と除去無年四十九と加る数単なれば男女の数なしべ女なりと大明律より出　又百病回春求嗣門も異法有

一　病人生死を見るは仏の上とわすれ去るべくなるべきなり仏のことわりもとものべくあるべくなるべきなり

一　温石すること多くもるかりうまの海のかさきもうやきて塩ひとりけ布ようたんくいむしやよあくだ〜

一　陳ようるるは蜀椒とかんで鼻乃ちぬるべ〜すけど

一　醋は草の葉のものぐしらるとうとうとう

一　まくらとおいとはなれてもとをかくしてあらしたまりて流れくる涙
まばらなる水面のうひうひしくて紙中に入て立その中よりあるを
他とひさあることをあるる
一　河源まつぶすとうふ物を物へうんじあるを合と合とは深き毒
あり人よりすすめよりあるを合をとさに後悔して捨て以
合をべうもの
一　歯をとるくるる所を拾とすこしまをてたるをきまて
用ゆ物半を去猶うて焼て用ゆ時珍云歯英ありはの物ぬ
の末をこ用ゆるも本草に時珍云歯英ありはの物ぬ
一　紙白灰を焼成くはるこまをうめて
鄭の肉と茶を共に用ゆ法白けを焼亜して拭ふ大
毒をとるるのくなる別の方法
一　異毒のたんをうとびれるるを紙の用てう
合根をしるのを一名を虎の尾何蘭陵の河畔にたん

一　根をとるふ茶毒の物にはたをうに赤き紙を
毒のぶより茶湯しおさ入るをなどよのあらるををこ
とを毒のられたるをしをふとをけで紙をきをく又
とを毒のをしをるうもしを茶のをるとつをてをよ
一　方の茶はくるをまるとをを方を茶をさのとをして竹と亜を
蠟燭と水をひををを

一 [illegible]

一 日和とりの八雑乃尾とたく生てんぐ 時ゝ尾すぐ

一 釜なる事寺にあるも鳴むなく氣うもびなる仰

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

いろうの変

一 小猫と絶て久敷成を見て小猫とも絶て久敷成を見て小猫と成て久敷成を見て小猫と成て久敷成を見て小猫と成

萬寶鄙事記巻五終

萬寶鄙事記巻五

十五　古天氣

日和乃善惡と見る事なり　船人のたるべき事のこゝろ　四

島とつゝる異人或ハ旅ハ乃人なども　殊よたるべき事也

唐書田家五行月令廣義　武備志　萬寶全書　圍史　五雜

組などと考へ合せ古歌の俗説とすべ　有て　事也と記て

一日　雨と晴と或ハ夕ハ晴乃天氣と日の出ハ雨とうゝ

夜ハ月の出ハ雨　雨ハ雨　雨ハ風　雨ハ風　雨ハ風

夕日の出るときハ雨　雨ハ風　雨ハ風　雨ハ風

口傳日乃陰陽の事　日出て　雨ハ風　雨ハ風

やうなとき　晴　日出　雨ハ風　雨ハ風

又ハ　の日和　人　の日の　と記

又ハ　日　の　晴　の日和　人　の日の　と記

ある　日　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨

けてやゝ　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨　雨

天気ハ雨ハ晴ハ雲ハ日ノ雲ハ夕ハ夜ハ曙ハ月ハ星ハ雨ハ風ハ

○日ノ出ハ黄ナルハ風　○日ノ入ハ月ハ雨ハ雪ハ霜ハ露ハ雷ハ少ハ

ナル雨ハ雪ハ霜ハ露ハ雷ハ少ハ　家ノ内ハ外ハ雨ハ

ハ　○夜ハ夜ハ風ハ　○昼ハ昼ハ風ハ

ハ　○日ノ入ハ月ハ出ハ月ハ出ハ月

○夕方のときそらぐもりあかねさしてひらを満天星ゝあるハ十秋に
天氣あくなり明日ハ雨○星つゆより大まちくゝあるハ雨
一暈　日のうさハ雨夕日のかさも雨又朝日のうさありて風
やくさあるとさハ風　○日のうさハ風雨星さハ大水星ハ大暈　○月の暈ハ雨黑氣あるも
あるもなれども主張雲なるなどいふ変のあるもなし
月ハ暈をもて雨ふるなり　○月のうさハ密中
天ハ雨より夫二ツ目のうまれて
月のもとのかりまハりゝ月のさ一方のみ雨ふる
ゝちまたの暈消えさるハ晴なりとよそ暈ハ主ハよ
りてこれをもて一時のよなり
一風　夕月大風ふんとそ必虹のごとくにてそれをもら
えれと魂かとりふ○夕日ハ風ふれて風和ふ夕月ハ和ふ明朝又
風ふぎゝ　○日の内ハ風ふるなりあるとあるゝ

日のうちハ風ふるなりあるとあるゝ　○夏ハ六月ハ雨天ハ
北の方なり　○東風ふるハ義星とそなりなり　東ハ
風ふ雨風ふそのうちまたハ晴る日ハ主ハ
ありふる雨風ハ風ふるくふ時ハ風ハ雨ようよく
夕ハ雨ハ風ふそ雨ふる雨ふ
四時ゝ風ふ雨ふ南ハ海ハ海ハ海ハ雨ふ　○朝風ふかな
より雨ふ海ハ海ふるなり
ふそふ雨ふと日ふ　○夕暮風ふけハ二三
日のあのざふかゝるを雨ふる　○風ハ南より始めて雨
風ふそれ雨ふ海なり　○孫ふ雨ひるの風ふ
ふるなりそれ　○大風ふ風ハ風ふ雨ふ
ぐゝあるて輝星ふ雨ふ　夕ハ月ハ暈ふて
ふきれぐゝふそ雨ふふくく黄ふてあるまり雨ふ
さざまゝそ日ふめぐりふ黄ふてもまゝ

○正月より雨ばかり降て
見と三にしをいふ○七月十四日のお盆まで嵐ふく
吹ぬと俗に唐ふと云○夏秋の洪水久しくてもとひろさ
おちとり数十日降りつゞき
大災の事
雨　○久雨の非れば
れの雨さたれば
うふ時雨ふかり
○晴望雨
それで天一神天
○久雨
大雨午時
天気

一

又雨ふり後れのあまぐらふ
○春甲子九日雨ふれば
八十地
雨降ぐ
もバ
いつ
一夜
○夏の甲子の日雨ふ
ふる
秋の甲子の雨
又
雨の甲子の雨八十年
ば
雨甲子
雨降る
雨
雨降る
雨
雨
雨
雨降る
雨
雨降る
雨降る
雨降る

○冬青葉に満るハ其年大さにゆたかなり　夏ハ用なし

○みな雪のうちに表実のうるをもて

雲　雲ハ（ゆきもて）ハ（北けど）雨なる東南ハ（くもり）
（ひがしなる）雨なる風なり　雨ハ（ひがしなる）雨なる風
（ひがしなる）雨なる風なり　○乾の方ハ雨なるハ晴
（あかくして）雨なるハ雨　○亀の縁のごく
なる雨なるハ雨　みな風なるハ雨　雨なる横ハ雨
なるなり　○みかさハ一寸ハ一分なり　○みかさハ
（しだく）満ハ大なる横ハ雨　○雨ハ（ぬれ）ハ（ぬれ）
（ぬれ）ハ（ぬれ）ハ（ぬれ）ハ

冬ハ晴天ニ成ル時ハ天氣ハ次第ニ悪�shiく成ル

○日ヘて曇ル時ハ雨降ルとの事ニ

一 天色　英国ハ風雨多く天氣早く変りて

ハ晴天ニ成ル時ハ雨少し○雨ハ多くして氣さ成ル時日

大抵風雨氣ハ不定氣象のごとくして雨ハ多ク

○天ハ多く氣四さ八風雨多く成ル天候ハ三日雨あり

一 霜　あさ夕ハ霜降ル時ハ晴

○大雪ハ霜降ル時ハ雨

氣ハ晴天ニ成ル時ハ雨

○霜降ル時ハ雨

○雪の雨降ル時ハ雪

一 雷　雨ハ雷ハ雷ハ雨

○雷の中ニ雷ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

一 電　秋晴天ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

一 霞　朝夕日の出ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時ハ雨

○雷ハ雨降ル時

ちの面にあり〜 ○ねびゝのうへのあるときいたちやうなるハ面

虹　みゞの下面にあるハ虹

一　春にはながゝるときハ雨しるし

○さりの方に風なるゝさりのうへ方にくもりあるとき雨

一　小雨　雲小雨とおもふハ大雨雲さえぎりて小雨見えざるハこれなるとき雨雲のあつく小雨となるハ雨の前黄雲のあつくこれなるハ晴る日あるべし白氣雨とおもふハ雨の内より雨表氣小雨とおもふハ雨のうちふる雨

○天より雲なくして小雨ハ天下に雲あるハ雨なり夫雨

○日の内にて拍子なくして雨ハ雨つゞきのつゞきのあるもの

雨ハ雨ひとつのさハ氣なるとき雨ハ雨つゞきのつゞき大風　○雲雨にとおもふハ雨　○雨の雨氣うるおひたるときハ

雨ハ雨　○雨の魁雨の雨氣うるおひたるときハ

雨ハ雨なるべし雨の前雨　○雨の前ハ黄氣あるとき雨

風ハ雨なるべしまたおもふハ雨氣あるとき雨

○雨ハ小雨とおもふて明るの天気ハ雨ハ小雨の上下黄あり

雲氣あるハその一日の内に雨ふる一日にいたるべし　雲

氣小雨とおもふひて黄白なるハ風なり赤黄雨ハ雨

大雨雨ハ風　○小雨の月あるとき雨氣あるハ雨の月大

模白氣なるて小雨の物の月ハ雨さえぎりあるハ雨ハ

大風氣雨　○小雨の上下黄氣あるとき雨

ハ雨氣雨　○雨の上下黄氣あるとき雨

一　天河　天河ハ雨すくなきハ月なり

○天河の内より雨雲あるハ大雨　○物雨天河の内より黑氣あるハ雨

○雨雲ハ天河をふさぐ雨ハ雨　○雲ふさぐ

一　物論　○春あるとかなるべし　○雲ふさぐ

ハ雨出方にりうよあつきハ雨ふる　○雨雨の雨ふる雨雨

雨ふる　○秋ハ雨くもりハ雨雨なるべしかなり春多く

雨ふれど雨なるべし　○春雨の日暮ハ雨と

ひとしきりあめ〜こなひのあめ〜ふりそれで蓮をうゑるあめ〜秋
雨の日てんだうとあさむしろ大風〜〜〜ひあめのあと
れたる雲〜〜〜○甲午の旬中から子孫氣いふんて
あつげ〜〜○朝日晴れでその日のうちはたり〜〜 昏
雨晴れで月の出るうちまあるあるのあるよう雨降
きるはうろ〜舟初てはれて久〜くくるくすると晴れで
久〜くあつむ○百日のうちに雲ありてよこ降られば
明日雨なる○晦日雨降れば月のてりめかりでは風
雨あり○六月はよう降り〜〜○六月ひとしきりでえ降
ひ〜〜〜日てる○春甲子雨降れで夜大旱で夜甲子
雨降れで又旱で○久雨久晴きのえの日よりかへて
○久雨晴れてのえの日てる
○久雨晴ざる雨下に降る久雨ふるへば色よふる
○八月よりへる明日ハ雨ふる傾よ八月の五ありと云

○十月ごろのうちハかすみ〜〜〜氣くさりあり〜〜
○海上の北きの方明るき夕小風ふくはれて天氣よくなる
るまで雨ふりて後なりハ晴る時はてはさなる雨
○紀風第とふ草を和名とちの〜〜第に風ぐさともいふ
作りてそのあとをうえてその〜〜大風のあとをもる第一
あもハそ年一度大ぜ吹ぷ二つあれで二度ふく
ふく年まあもたで夜つく中まあもとで夜秋ふく年よあると
きハ第大風を○鶉とそくさまるハ雨○物地とうさて庚
のとよ眠るハ雨○物のまさまとうむとはつ○橋まを
ばくらふる雨○蟋蟀夜あつまりむとぶるハ雨○蜻蛉
〜〜ちまちんぶれ〜ふい雨○蚯蚓鳴ふ氣くさ氣注
○蜻蛉〜〜〜ぶ〜〜〜ぶ〜〜〜ぶ

[illegible]

○池水山を出れば大雨降る

十六　月令　十二月乃至[illegible]

▲正月○元日雨ふれば麦豊作○春日ひまなく日ひらけば麦不作○[illegible]
[illegible]○元日ふれば天氣和ら○日の[illegible]
○月雪[illegible]○立春の日天氣[illegible]
[illegible]○立春の日風[illegible]
[illegible]

一二月○初日[illegible]○[illegible]
○[illegible]

一三月○三月三朔なれば[illegible]
○三月雨ふれば[illegible]
○月雪ふりては[illegible]
○[illegible]八三月[illegible]
○三月[illegible]
雨ふれば百[illegible]
[illegible]

一四月○朔日晴れ[illegible]
○十六日月[illegible]
○立夏の日日[illegible]

○去年の日天くもりでひぐり

一 八月○農人のもうす稲のくれかたもまれて一年の農

はとうくるふ今日雨ふれでありまし○八月六日雨まれ

あつまる八三年ぶ○去年の日雨一度雨もなし千今まで

○夏至より日のうさあるハ大水出○夏至より雨ふる事

○八月年のちまきとらぶハぞんハ家ぞとなるもべらぶ

以ハ八月まぶくふ稲ふそ乳のうる

一 六月○八月穀ぶうぶれハ去年穀ぶうぶ八月ぶ稲ぶさハ賊水と

云て悪ぶ○作ぶ去年の古月の月ぶ稲ぶ去年穀ぶ

又去年月ぶ雨ぶ多ぶ稲ぶ穀ぶ去年穀ぶ

一 七月○穀ぶ秋ぶ日天氣晴ぶ

づらぶれて猫ぶ○七月雨ぶ

一 八月○八月去年の日雨ぶ

ぶ去年穀ぶ

○八月中ぶ日晴ぶ

一 九月○一日より九日まで雨ぶ穀ぶ○九日

雨ぶ去年穀ぶ○十三日晴ぶ○九日雨ぶ

一 十月○稲ぶ以ぶ風ふけハ去年穀ぶ○十月去年の

日ぶ晴ぶ去年○十月中ぶ日ぶ晴ぶ穀ぶ

○八月去年ぶ雨ぶ去年春ぶ

○十月ぶ乃日雨ぶ雨ぶ合ぶ

一 十月○冬至ぶ日ぶ晴ぶ

○八月雪ぶ去年ぶ

一 十二月○稲ぶ風ぶ去年ぶ去年穀ぶ

○冬ぶ稲ぶ十三ぶ風ぶ日ぶ

白ぶ去年穀ぶ穀ぶ

○八月雪ぶ中ぶ去年ぶ

○時いづらるれハ万事日ごろとなるべし

○屋の中に白ものくれでハ万事白ごめくなり

百疫論事記巻六

萬疫論事記巻七

十七　養氣

○ひとりの人の身のうちにこれとなして欲と慾と
和とハ欲とハ何そ
慾と和とハ何そ
慾と和とハ何そ
慾と和

[illegible]

○人の肉は穢氣ことの人の為に害となる
物の腐るもあるもそれと同じく病となる
もの腐氣よりやぶるゝ物なり
きもの心氣とをつべし人氣とやまこゝろ
まの氣とやまこゝろ心氣とをつべし人氣とやまこゝろ
たゞ一ツ氣とやまこゝろ心氣とをつ
なれどもくだりいたるとつ
の中よりとすべし人の氣こゝろ氣こゝろ
ひとかたの　[illegible]とはの為の
動静なり為の動静とをつべし　[illegible]
敬内のつゝしみをこゝろ氣とをつ
いとあり元氣とをつべし　[illegible]
為にこゝろ氣とをつ

氣血と飲食とこゝろ病となり元氣なる
大欲食色欲氣血心氣とをつ
欲なれどかゝるこゝろのまゝ節なくして為を抑ふ
はなるとよくはたらしむと云ことなれて養生の法は
別にこれなし一ツよつしてつゝしみとして
○をよそ百病は氣より生ぜ飲食色欲氣血心氣
やぶるゝ為なり氣こゝろ
○人の氣はつゝのびて活
こゝろ氣なれば氣つゝ
○人の人は常にやすむべし
つゝよ和氣あり常の疲は
氣をもつて氣をもつて人と
うむまり為よ銀銀[illegible]

世をうごかす力の元なるゆえ
○人となれて世のすべりたるさまを見るにつけ
るにつけて年々いよいよ世人をやみなの変にはうつて
ざるかのごとくもあるべきなれども
たとへるまでなりたるさまを見るにつけ
心のおくいとかの用をもみてもあるべき
ありさまをもうさるべきなるひ
とたりて天命をさのこるのげにくるべき
うさ事はつるのたくしのたくしのたくしん
○人の中につるの楽をうんちうとあるまでの不安の災難さ
うしてもつるまでんのなやうさものもつるあるは常
楽をうるのくをだ〜たとへで財産のおくして老衰なる
人を不幸なるあるはて紙をあるのくはるやせでも困窮せ
ざるのごとくまさに湯気をうんなるの人は風をもあるべ

○いさをなるめで気をよくなる心居をれで気をよくなる
又人屈〜気ふさぐりるるは人気もまたりて
しるるをうたるのあるものはたりてよりてを
りるる迎気のうるるとのひてあるべくるを気のふさぐ
でたるよくなるるなるう病人をえるもさんるあるは
ふさぐるる病人をえて気をうしなるやまを事
○俗のよはの意のあひ事の艱苦をるを財せでんをひ
くして気を居をべるるりつまりてまるを
のひをれたるを艱苦をものがるはうるるもの
○物の為に難苦をるるひ出るるるるを
不安をるるをるべて物ごるるるを
○気をれるをみるにつるやるるるるるるるるるる
消えて気をるるるすをるるるるを気をるるるる
なりて病をるるるるるるるるる

ふつう等〔ぶんりん〕拘攣〔こうれん〕〜みな痙〔けい〕攣〔れん〕〜抽搐〔ちゅうてき〕〜抽搐〔ちゅうてき〕〜者は氣をのぞくこと
で氣を用ふべし〜〜〜

行せいさ〻〻〻〻碎人のるようそ流て いるゆざるもいさ〻つるりんよ
物あるまで勇かさくなりてあるるふいくむものそう
○祈るゆ〻〻氣ゆ〻つてつよくなるハ祈るやめで氣とつるつ
しそあつまるゆ〻よ氣ゆよ〻〻〻○祈てくびまてうとゆ花
ゆよかれで氣新しもたつくなる事をあるひハ勇労あと
いゆども思おるよ出さ人よ對さもで常のどくつとめらるも
祈そを流とひさて祈事新うちとゆるでとるるるまて
みゆ行せでゆ〻〻ぬ立あるまてちく〻いそてひもの〻先志よ
り氣とり行れいつ○家とあんめざるるあるひハ勇よ陰虫な
どあるていさ〻書〻さはて書〻〻〻そいくむ不と書者〻〻て氣と
あつひまバつよく〻痛〻て金る事を〻〻〻痛むあよ氣とつ
きを〻ゆるよんとよ武ハ寄よ對て拔るどもれで氣ゆ
祈まく〻いく〻とよ〻〻〻也〻〻ひ勇とうちて病なでお見痛
〻〻〻く〻ゆへ祈〻いうれ人よ對て拔なとして祈〻む

五とゆ〻〻〻〻大〻〻〻よ痛れとゆ〻〻氣と一五〻〻祈ゆざるを
よ〻〻〻○久〻〻〻ひさまづつき居れで居よ氣與め〻〻〻ハ
るゆゆ〻よ痛よ立あれでゆ居ひてひまぞ祈るて見の大指
とゆ〻〻〻〻〻ごゆ〻〻見のさ〻〻〻〻よ氣とゆ居れとゆ居て痛〻
患ゆ〻〻○氣のゆりて今〻〻ひとき八見のこゆ〻〻と押ゆ〻〻
〻〻〻〻氣〻〻るなり○氣ハ一勇乃角よ一〻人よ周くめぐ
りりて充満ゆ〻〻〻〻る對一和よあつむ〻〻〻〻も脳よ
氣とあつひまとん動きいゆ祈て病とるゆ○胸
中よ氣のあつま〻〻ゆ居ハよんを見〻〻○こゆ〻〻〻が〻つ〻
る時今の大指とゆ居れ〻〻〻〻〻〻押つを〻〻ゆ
で〻〻〻〻〻〻

十八　食禁

一　紫蘇　鯉魚と同じく食すべからず　毒なり

一　蓼　食すべからず　氣乏る○婦人水の時蓼を食へば淋病となる

一　韭　傷寒の後十日以内食すべからず　出たる○但産月より食すれば氣

一　葱　ともらも○産後食すべからず○麥牛肉と同食すべからず

一　葱　産後食すべからず　葱と同食すれば下痢す○栗

と同食すべからず○雉と同食すれば血病となる○地黄常

山と作る人不宜食

一　胡荽　臭し　人に害あり　食すべからず　喘となる

一　薤　三月より食すべからず

一　大蒜　地黄　牡丹皮と作る人蒜を忌む○産月食ふべからず

○客と同食すれば人と二病を○一切の補藥と作る食べからず

一　松　耳茸と服する人食べからず　目病○産乃ち不宜

一　茶　魚と同食すべからず　熱病○鄰魚と同食すれば水腫となる

一　菜菔　根茎ともに地黄と同食すれば脚白くなるうき茎

著しき地黄と同食すべからず　ひげ事　大根の葉あり　八月

一　生薑　八九月より食すれば眼病となり茅を抜き

能力乏る常のときも多く食ふべからず　根入て食べ

一　蒐　ごとくなり同食すべからず○驚甲を作る人食べからず

一　芹　蒲と和して食べからず　子六月抜くなる

一　茄子　天行病の後食ふべからず　抜て○赤芽を人と害す

一　たべからず　柑橘と同五倍子強腫と同食すれば人を害す

一　茸　諸魚と同食すべからず

一　鮒　魚と同食すべからず　○鮒と同食すべからず○

一　榜　鮮と同食すべからず　疾となる　先年苦まれたる

一 茶　杏仁と同合されば咳を止む
一 思大至　草麻子と炒るを人物忘れとなるべし　○厚朴を炒る人は忘れず
一 腎　紀と合されば中に痰を生ず
一 茱萸　和俗云ふ山びの形と同合されば疾を起して死を救
人犯したると見えたり
一 酢　茯苓・神麻・麻子を肝を酢に浸して風あれば痛とせず　○酒を絞て冷水を注ぎて
一 酒　頭痛する○酒を絞よ茶とのめば腎をやぶる
痛痺となる○麻子と炒るを人腎の虚痛となる○酒を絞よ茶とのめば
筋骨ゆるくなる○酒を絞よ茶とのめば
一 李　木と炒る人いむべし
一 杏仁　両仁なる物は毒あり人を殺す
一 桃　小毒あり合して物あり合す　木と炒る人よいむ
○ごとに同合されば人痛む

一 石榴　茶とのむ人合べからず
一 楊梅　生姜と同合べからず
一 胡桃　酒と同合するの多ければ血をとく
一 紅花　うるさと同合べからず
一 棗　葱と同合べからず
一 蜀椒　こごりに合ふたる毒あり　○六月より合ふるの氣
を抜くんどやぶる　○口とづるものを人と書き
一 枇杷　美りうる肉又樂芳と同合すれば樂芳痛となる
一 甘瓜　池餅と同合べからず入てもづむる人となる
一 茶　蔵霊仙土茯苓を炒る人茶とのむべからず　椹実と同
合されば為物となる　○大豆湯さ及び酒浸よ茶とのめば
腎に入て炒る病起る　○空腹よ茶とのめば
腎に入ることとなる　又脾胃を冷やす
一 砂糖　鮒と同合されば炒る

一 鯉魚　天門冬麻を服する人食べからず　○鯉魚とあふる柳用ゆ入きた光と相反

一 鄉魚　蒜と和して食べからず　○猪肉と同食すれば麻せざるはなし　○芹と同食すれば弱神を失ふ　○鶏雞肉と同食すれば癰疽はなし　○麦門冬と同食すれば人を害す

一 鰻魚　猪乃下に思さまざまあるは毒あり　○泥書と同食すれば

一 鱸魚　芒麦と食すれば吉あり　○荊芥と服する人

一 鱸魚　猪と同食すれば龜甲を傷する　○荊芥と食すれば　○鹿と同食すれば筋甲を傷する

一 河豚　大麻を食ふべからず　○同あらくひきつりあるきはかの人を害する　○汀豚と食べからず　一日の内禁と服べからず　○蜜と同食べからず　○荊芥　茉莉花　柱後　其草　柱子　馬頭　とれなり

一 鰕　水田芹と薄荷はなはだ毒あり　鮒の鮒もつとも毒あり　鮒なく及び下面　○小豆及び鶏肉　芹と茗と食べからず　弱

一 どじょう　頭の下に軟骨あり　是を取て酒と

づけ　○とうそ　三年の蓄　赤豆のもの　竹間のもの　豆

と是をもちて用るもの　猪肉のもの　○の字トの字あるもの

股に蛇の文あるもの　○の上にあるもの　竹人を害する

食べからず　○ごうがめ　○しゃめ　鶏乃卵子　蒐と同食べからず

○猪鬼あり　○茶子と同食べからず

恐嗽とはなはだ　○とうがらし　○子のくび　雑

荊芥　とうがらしと茗と人を害す

魚鱠　仇と同食べからず　鶏と　ひて冷水とのむ

べからず　虫とはなはだ　秋はふーして食べからず　清酒

鮒乃うちよりかくあれば人を害す　○雑熟せざるは人の

脾胃を扶ぐ。○もろこしの粉の麦麩蓉と同じ。○もろこしの粉の麦麩蓉と同じ。○もろこしの粉の麦麩蓉と同じ。

一 家鴨　目のひかりを人に害す

一 兎　胡地本草に毒なし。人を駭す。○小児癲癇となる。○蘇芥子李と合

一 豬　胃を食ふるに蛔出て生ず。○蘇芥子李と合

せざれば下りて蛔出て生ず。○血の汁と同じ食すれば心癇となる

○鮒と同じく食へば痢を生ず。○生姜と同じくく

ら〳〵と病を成す。○橋柱と同じく蛔出て生ず。○

鶏は毒ある物を食へば思ふの故白きもの六指の物けづの類

ある物死をくらはのびざる人を害す

一 雉　九月より十月まで胡地蘭本のること同じ。○蓉麦と

同じ。○死せるものひざるものハ人をこ

つる。○鼓と同じく食へば肥出て生ず。鼓と同

一 山鶉　蓉麦と同じ

一 鶴　蘭と同じ。○疼をなる

一 雀　杏と同じ。○もろこしの目死して目周りのびず。もろこしの頭くら

さるものくらるの死もろこしの三年目ごとの指お

よそ形矢なる物をとらふ時をもろ人をとろて

一 狸　細辛と指る人に

一 兎　薑橘茱萸と指る人に

一 猫　八月八日に八月十月

まで八合をもて除の月八日にやぶる。○孕婦くらふ

べからず

一 豕肉　烏梅桔梗茨連胡黄連蓉耳と反す。○蓉麦

と同食されて毛蝨を生ずる○風病を発する人○呉茱萸
少し同食されて病おこる○鶏子と同食されて乳
ゝこわる○ごうがと同食されて人をそこなう○韮
草はぶくとをくむ

一 狗 蒜と同しく食ふべからず○ねのたく生薑と
同食べからず○巴豆を服する人これをいむ

一 鶏 九月以後正月以前はくらふべからず肺よわくらふべ
○狗たちく鶏の文ありものをくらふべからず○雞雛
と同食べからず熱病おこる

一 牛 胡桃と同食されて熱病おこる○とうて
六畜自死たちく口とぢ疫病疫病とやゝ死したるハ
ゝらふべからず○ゝは煮たりされども死したる
病者のたる乾したる肉ふべからず
ゝりて乾ざる肉ハ食ふべからず夜とたくさん肉を

食べハ人の病なるあり○魚あるされ肉ありこれなる人食ふ
ゝらず

右同食の禁忌今案をもるよりあるもを又古
なきもあるを人ようなるよう食量の多少なる
変ずるべ〜古人の拘ひよりあるかるして理なき
なもみぐちよりなるよりあるかるして害
なしといひども時ようづ
はるるかゝぐ法もんくるやぶとあるも
脾胃つよき人を禁忌をとあるを中なれ
あるべ〜ゝをとるものべからず
理あり

○脾胃よわき人ハ一切の生冷あらゝこをきれ
かくこハきあるまくさを泳でをきしるきもの
生なるこのゝ生ある肉ありますさゝん法紀〜ざ

[illegible]

○[illegible]葉を服する時は牛蒡 蒟蒻 ぶさ指の肉 [illegible] 乳あげ [illegible] 鶏 さ [illegible] 凡なべてこの魚の毒のこと [illegible] 地 [illegible] もの牛 [illegible] 乃地 [illegible] [illegible] 地といむ

十九 用藥

一○[illegible]敬深下等のつよ沢茅を澤と藥とを [illegible] 用ゆ [illegible] 茅加よハ [illegible] 補藥ハ二貼の澤と合して一貼として一服の [illegible] 用て [illegible] 熟して [illegible] と吹む亦一服乃新茅と同じ [illegible] 攻書の茅てかるゝ [illegible] を [illegible] 変る [illegible]

一○九茅よ [illegible] 水百二十目を練茅百二十目と用ひ清水四十目を加へて和し [illegible] 右二条本草蒙筌書に保元 [illegible] 加へてすかくのごとくもちゆ [illegible] 八味丸ごとに丸ぜて [illegible] 丸じてのち乾さやして [illegible] 用ゆ [illegible] 水をくゝめて丸じて [illegible] 日よりしてかくもたし [illegible] 丸じて [illegible]

一○千金方ニ曰茶ヲ[illegible]ニ用ル茶カラモ[illegible]
[illegible]ニ用ヒル茶モ[illegible]サヒヨク[illegible]新シキ
瓦器ニ入テ泥シテ口ヲ封ジ用ルトキ風ニ[illegible]ヲ[illegible]
ヨク乾[illegible]ヲ[illegible]新シキ[illegible]ヨクツヽミ[illegible]
[illegible]ヨリ也泥ヨク[illegible]ウヲ[illegible]紙ヨクヨク
ヲトヒテモ[illegible]○當歸 地黄 蒼朮 棗 桃仁 白芷 神
麹 白朮 杏仁 川芎 なども[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
麦門冬 [illegible]ヲ去る法 [illegible]ヲ[illegible]
官紙 [illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
久〻〻[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
一麦門冬 [illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
一茶ヲ煮る商人ハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]

味ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
一茶ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
一
小千[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
泡ヲ一日小一度ツヽ沸湯ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]
白礬湯ヲ和〻〻小[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]ヲ[illegible]

金箔あるいは紙などにて包ひ麩室に
金英なるかしこ　蒸すのち日に干して大きなる
とくだくかくのごとくまたくりかへす　蒸かへし　南星もかかへし　製
法すりぬけ　せんして　毒気ぬけ　もぐ　南星は大なるを用ひ
白朮　茯苓　羌活　独活　青皮　陳皮　防風　升麻　枳殻　枳実　な
ど　はかるべし　和茯苓　性あり　和茯苓　性中　升麻は
和茯苓と用ひ　芎藭　芍薬　柴胡　防風　害あり
○羌活　独活　もみ　すり　陳皮　柴胡　河原柴
胡と用ひべし　梁州　柴胡　はあらず　ひこと用ひて
地黄　当帰　茯苓　白朮　白芷　防風　茯苓の葉なり　きざみ
とせと　夏月　くびあて　性あり　くなる　或は酒　煮　小ひさ
せるなり　すり　相の器　よりの　蒸　もかびあるは　小さ
蒸　よりの　口　よくつめて　氣のとおるさまを　だ
それもかびあり　相の　器をやらふさよ　作りて

一

一

十九ほんの紙にて　ちぶりは　角よりの布　紙のかをつきて
ことと　ぬるとて　ぬるよりの　口紙で　紙と　ぬるてつめ
氣乃かよふるやうにすべし　柳の　久しくあるてもかびあるぞ
山法　もつとも　すとす　丸て　茶を　一時よりの　久しくさざみ
とくだくもの　刻て　久しくあるうて　氣うるくるうて　性
よりの　肉桂　なとは　用ひとき　刻ひべし　きざみをけて　氣
あるよりの　高くなるは　性　一茶を　煎るもの　ちりかるぞ
蒸よくなるとおるよりは　柳の　乃あるよりて　撰さ
肉よりの　蒸乃口と　紙のうの　とはて　厚くなるべし　芒時
珍ぶ　流るるよりの　ものを　熟しかびて　なるは　熟くなる
とよりて　茶よりの　ひやとき　抱えて　先柳の　乃あるよりて　さて
柳の　乃も　時　るる日は　とりあり　て　年もべし　但　流よ
さ日よりの　結び　性　とて　とくなる
茶子は　相鮮　より　用ひる　とを　用ひて　廣　茶子は　三　次なり

和漢ハ用ゆるとも紙なくして味のよきを取て茶の湯
鮮乃茶ハ茶ハ茶あり茶美なり
一 日本人柏樹と根殼とくらもあやまり唐より来る根
殼根実と用ゆべし 山茶種泥雑を如茶とよくかんがへ
見て撰ひ取べし 根殼ハあ
らず
一 九茶大さるして中唐やもし
一 ○熟地黄と制ずる法 生地黄を紙にたけちくちゃん
鉢に入て蒸籠乃うちに置て蒸て皮ハ去湯の中に
酒とのくよ 蒸籠乃内ハ下に地黄けりれて糟とう
て性よい ○ゆ(に)ゆ(に)ゆ(に)

乳香をへたるに乳香に麝香にかをりて他薬も称
ずる也乳香大と思ひ（よるあつる事あり）（ゝもどみあぶもど）
ひくまるものも中薬ハ（薫陸乳香一物ハ）（ゝらに性ハ）
夏ハ乳香ハ（ゝ）（ゝ）（ゝ）（ゝ）

一
薬と薬ぎる法　先ぐら（前）とくさて（紙）決を
もちゐ（ゝ）もぐ（ゝ）たぐ（ゝ）ハ前とともくなくして
交決とまくゝ（ゝ）ハ決代用て契ぎるも山
法のごとくなる（ゝ）　○時時ハ西方ハ黄茅ハ
芳水と陳蒿決を用ゆ（ゝ）決様ゝ
ると（ゝ）ゝ言んも茶を
とたゝりゝ（ゝ）ぐ（ゝ）
やゝゝふゝりて（ゝ）
茶と黄ぎるのゝ（ゝ）

一
一切の法神ゝくゝりを黄ぎ
中薬綱目ゝ（ゝ）ゝゝ
つゝゝぎて茶力を
ゝ茶力をたゝく世俗
一
とゝゝ法病ゝ茶ゝ
病ゝくゝりと用ゐて
治して中病ゝ茶を用
つゝゝぎ茶を
治ゝる事ゝ
ありゝと茶ゝぶらゝ
隋雑著ゝぞゝ
一
他ゝゝ
と食ゝゝ
太乙膏新ゝ

（ゝ）決代を
ゝ決ゝ
ゝ決ゝ
ゝ決ゝ

一 胡椒の膏薬をつきて腰と脇とを指ぬり むだ人力とまひして れ出まへ 一日に三度ほどぬる

一 枯樓根 ろうだんと ひつきりにきりよへもてやくべし 多くへたるにちかさ 古器はたくへくはあつくして焼 ぐ下よくやきもぐ やきぐ 器をやくに火入てやくべし 焼くもんはんやむはまで やくべし 焼くもんはんやむはまで

一 茅乃根とうやきたるを もちゆその中に茶根と 入るなるなべ 蓋こはの乃 蓋の 締とさるべし ふたとして 蓋の まりりと紙をく 四方返乃 ぬりまくはり小縄をもちて 戒を ぬもまきとと 大豆乃下沃の中 大豆をさき大気とりてを 中の茶根沸合くよく 熟しるべし 熟せざる間よりとり出べ ありひぬをひもをぬ 根よ

一 温石 温石よ 火よくやきあつひ あるて 巻て 巻つ 足角とあるもの 武かつけ を用 角もよ 又温石として白 あるくやうるるを 又よいぬ そ乃灰を 用乃 り 茅よ入もて 土角よ 火と 入て 温乃 詩よ用 も 古

一 胡椒 胡椒とき 味和と多く 庭中 中は 乃 れ 乃 て 茶と 茶と 茶と

用て干度もとめ〳〵乾燥〳〵干きべ〳〵拍子用ハひらぎと
風下に置て日ハとうあり七日干きべ〳〵
一竹瀝ととる法　生淡竹を丸のまゝもちゐ切てるべ〳〵
一方ハ節をとゞめて炭火すてあぶりつゝ出る雫を受て
汁をとるべ〳〵竹をとりて〳〵入用のときもの
一蕪菁子大蒜を多く收をとく〳〵
一松葉子の油頭ハぬれて髮をもちゐ中華ハ
一疫病乃病人のあるハ入る人ハ油酒と称て頭ハ
疫氣ハ五月まで又椒茨の末と大豆わゝ用ひて絲ハつゝ
梟一宅をふさぐ〳〵男ハ女ハ太又疫氣ハ
茶ホとあくべ〳〵奇南香をきゝて
だと云茶乃茶ハ
氣とさるものゝ病人分條乃人もかくのごとくしてもべ〳〵
一疫病　六月七日ハとりて煎法ハ
一脫肛泄瀉痢病下血

一
一
一

ごとくに九ぢ〳〵乾すべし陰乾の流なり一流は二寸を乃大さの如
とをいふ深拓の大さとは拓桐る二十粒ばかりの事なり
こゝろ〳〵に文或大といふはめるゝもはぢ〳〵ゝゝゝ大と云唐詩選吹注

一 茶をとるは九月九日なるを常とす干にも〳〵九月に落る
こゝろ陰干にも〳〵と本草序例にえらん湯月は八日ほは
〳〵宮月は陰干すべしといへり蒙荷などは生にて
を日に干てよく揉むべし
黄茶殺茶湯下乃くさ〳〵
〳〵黄用はいろ茶にて
きなるをよく黄ばつて黄ばつてつめざるべ
よく熟せ〳〵補茶は茶を殺せんとて法のて
ぬるを〳〵で晒湯も
やう〳〵なるべし乃拓を用てほ〳〵揚拓はかゝてよ〳〵○
まろふさ もえ松 乃拓はくさいぞまとよ〳〵

一 ふさをかり薪とするべし〳〵
くまのゝ乃用の法
をきこゝろ〳〵そくまの乃ねと茶一粒程ろくあるもんの
肉は金で金線のぬくもの乃ねとは水一椀をたくわれ
ゆうちゆ乃は生なりと事林廣記みるよりこゝろといれてくま
乃ねと水は金てかこるもちろを正き
もの〳〵勝と用こりちゆ熟地黄の製法 薑汁 熊膽乃そるべしきるは法
熟地黄の製法 薑汁 物をもむものはなるべ
ともつくゆはひ〳〵 地黄にたくさんもぜて 加味に
さ〳〵地黄をのべ〳〵 ひゆ物に乃香氣をもつて
の乳をもつて丹田に 沉宿をさんれ本草洞詮乃説なり
茯苓は大ぶりてをきをと
お命あるは用べ〳〵 目ぬぐ〳〵 久く虚るを病と

一 就脳を搾抜ノ法 とき搾ノ角〳〵にして切て細末とし
和の糊治ノ紙に膏とのぶ阿蒙地流の本紙ともち
紙にうきみを乳とふさぐかるがゆへに不用と云
一 梔心を末にするに茶を入て茶研によく研て
細末と角ノ板にかのこ打て末にしたる茶搾にうづ
下にを末にするにハ内ちゞめを加へて末にだし
とゝて和茶を用こと乃也
一 のゝ茶と知く用ひ〳〵
棒脳のやさかへ〳〵を久しく粗をたゝらぬ

二十 灸治

一 切艾茶乃法 法師のごとく紙を長く廣く淡き紙の端を糊
まくつを糊うふきてけちをさ二分ほあまりにうそぎよりて
つゝけてみ紙ともちひ乃紙をうねをくさりて切もぐ
さ乃ちこまのりをつを三紙のうへ〳〵にをくべし〳〵絲とき日
ふ干て一ツつゝその日紙と切るゝ続ともつくかゝのあ
まりを切ぬ〳〵灸をする時やいとのうこと打糊をつをてお
ちざるやうにまぬ〳〵あるひハ絲より紙ぬるを者が板より
こゝに茶を付く灸をもとで摸痛ふうふ茶〳〵うこと
はゝえやもく〳〵こゝ搾ふ灸をもれで摸痛をしうもと
度ふく激〳〵く摸さ事一久しきゆへ灸一壮ハひと
つとゝぐさ二壮ふあるは灸をもあしで灸瘡ふく絶る
事ひとうもぐさるまゝ
四部ふ灸をする此中脳天梔ふ灸〳〵く後四部ふもぐ〳〵

強らざるを強よ氣あつまり強くてもあしきよりもそ

一 灸火をこころゝ為に大陽乃火をとるべし次は

槐の木をもみて火をとるべし おもうさしたる胡麻の

油或ハ燭燭乃火を用ゆべし 完本草綱目所載諸方

一 灸法あぶりかゝるべく 灸もえやすく力を

てもゝ あるもあり 灸もえかゝりて ゆるゝ

箭をもて物をうゝ 火をとりて 艾を ハ二月三月苗みじゝ

さをとるべし 火をとるたハ石の火をおもゝ あるひ多

鼎 大陽乃火をとるべし

鍼灸聚英ニ出メリ

一 灸をもちゆ 春ハ春分の未清明の初めより 陽氣の

發生をたすけ陰氣をたゝ 風をふせぎ 邪をのぞくべし

ゆりをもちゆ 溫るべく 神氣をもつ

秋ハ白露の節乃お後より 暖なる氣

ゝ 陰をたすけ 秋分のおもよりて 自然なる氣退屈せ

ず風ひゝくべきなり 熱痛をも 陰乃やゝ

未八月のゝ 七月の

陰精をおゝ ゝ風をよけ 夏月よりあせ

秋の陰氣 感冒瘧痢 多おこりやすし

よりたて 灸をもちゆ 表氣 病

なる氣おこりゝ 絲巾の陽氣もこゝ

乃人秋の灸をもちゆ 九月十月の 風をふせ

一 灸をもちゆ 醫書乃 日おゝ 古人のこ

こゝろをもちゆ 肉絶ゆ 人神を

信じ 人神を 血氣日あり 又四時 ゆ

十二支 ゆ 氣 ゆ

ひ 保 ゆ 氣 ゆ

鍼灸聚英 ゆ

痛のうたがるるものに灸をすえて信〻かく

一灸をすえたる処の日数を記すべし

四月は丑の日をいむべし四月の内より二月の内の丑の日と二月の内の丑の日をいむべし

二月の灸は二月の内の丑の日より後は二月の灸をもちひて四月の血忌に用ひ

又十二月乃内は四月の血忌を用ひて十二月の灸をもちひ用ゆべし今の暦にもかくのごとくあるべし

一或人の曰く老人小児みな若しくは虚人を灸多くすべからざるなり灸あ〻その血気の虚弱なるを恐れて

冒しく灸すべからざるなり

なく小なりとも度〻灸すべし

さめぬ内はそのまま灸すべし次の灸

とすべし熱乃さめざる内はおく灸をいるべきなり

一或人の曰く灸を好てぬるる人は雪隠すして寒ぬ

三穴灸すべし十日二十日を隔てて又二三穴は灸

をたすけてさんはるりやまひおこる事なし

一或老人八十八歳毎月灸治をすること庸寧也此法今

益あり

一灸をすえたる酒とおのこてをもてだいてさんはるやうにして

こすりやすべて灸をするハあ〻

寶永二乙酉年　孟夏吉辰
洛陽六角通書林
茨城多左衛門板行

蓋軒翁因原採事記八冊積日
而成第功未了付文政三
年庚辰仲秋十日　中村萬
紀直道